

御承知の通り、ギリシヤの歴史を讀みますと、ヘルシヤの大軍をギリシヤは遂に撃退し、アテネが海峽諸國の覇者となつた時に、アテネは海峽の諸國から租税を取り立て、それを悉くアテネ自身の防備に使つた。大いなる城壁を建てて、これなら大丈夫と考へたが、敵に對しては大丈夫であつたかも知れんけれども、味方から誅求して、これを己れ一人、私のためにしたが故に、味方が悉くアテネに叛いて、すなはち禍は脚下より起つたのである。それで私共は、勝つたから勝者の權をもつて取るだけは取る。掠めるだけは掠める。なんでもかんでも日本に持つて來さへすればよいといふやうな料簡では、日本は決してアジアの盟主となることは出來ないのであります。我々は何よりも日本を模範國とし、日本國民を模範國民とし、總てアジアの者が日本を中心として、日本を慕うて、さうして日本に來るやうにせねばならないと思ふのであります。少し工合が悪うございますから、これで私のお話は終りと致します。

聖・戰・詩・鈔

聖詔渙發

天書宣戰疾如雷。

億兆驩呼顏色開。

驕米猾英肝膽落。

蹴雲破浪神兵來。

海軍凱歌

捨身決死奏奇功。

擊滅敵船指顧中。

休說英雄不世出。

皇民一億皆英雄。

21015

IMT 542

勅題「連峰雲」

絕海樓船百萬軍。

挺身誓報聖明君。

請看東亞興隆氣。

擬作連峰五彩雲。

香港陷落

東侵黠虜著先鞭。

虎踞香門已百年。

驚喜仰天呼萬歲。

旭旗高颺女皇巔。

新正

曉鷄告新禧。

自驚八十翁。

四朝浴聖澤。

涓埃報效空。

幾度罹篤疾。

回生九死中。

行路多荆棘。

芟除心力窮。

兩兒已逝矣。

憶起哀淚紅。

故舊概凋落。

懷抱與誰同。

烽火滿天地。

禍亂及大東。

將兵皆奮躍。

勇決有諸公。

今上真英武。

際會國運隆。

微臣傷衰朽。

猶存一寸忠。

祖宗鴻謨遠。

八紘仰皇風。

新 正

膺英德米各爭先。

赫奕皇威東亞天。

遙拜楓宸還自祝。

迎來尙父鷹揚年。

馬尼刺陷落

疾如飛電靜如林。

陸則攻堅海擊沈。

地下猴郎應一笑。

大成宿昔圖南心。

星港陷落

長江天塹控三洋。

歐亞關門作鐵城。

霹靂震空坤軸裂。

日東男子是神兵。

星港陷落

陷落星坡絕代功。

老獅霸業半成空。

日東男子有雄志。

更駕南溟萬里風。

旭 旗 風

馬關砲擊薩南寇。

緬想當時血淚紅。

正值龍興皇運日。

太平洋上旭旗風。

太 平 洋 凱 歌

轟雷飛電凌虛翔。

戰艦森森我武揚。

百萬妖鯨一掃盡。

皇風吹入太平洋。

照 大 東

瘦脚珊瑚八十翁。

素心報國愧無功。

攀龍附鳳諸公在。

誰挑皇光照大東。

附  
載

IMT 542

(編者註) 『英國の虚喝をしりぞけよ』 『皇室中心の高揚と恐英病の排撃』 『皇政革新の理想と亞細亞の興隆』 『東亞の操縦者各位に告ぐ』 の四篇は、年代的に見れば聊か舊いかも知れない。併し蘇峰翁は支那事變の當初より、支那の背後に在るものを撃たざる限り、支那事變の終結は望めず、大東亞の和平も到来せぬことを叫び續けた。特に翁が恐英、怖英、崇英の精神を拂拭して、英米を撃滅す可しといふこと、軍事行動の赫々たる武勳に對して、我國の外交が兎角同一歩調を取り得ないことを遺憾として、外交に就いて強張たる可きことを主張し續けて來たこと、及び日獨伊三國提携を強調したことは、特筆せねばならぬことであると思ふ。而して大東亞戰爭は即ち翁の年來の主張が貫徹し、雲霧を拂して太陽を拜せる如きものであつた。乃ち翁の論策の一の記念として、此の四篇を附載する所以である。

## 英國の虚喝をしりぞけよ

### ◆支那の背後に在るもの

本日は見かけますところ、非常に盛會で、洵に皆さま方の御熱心はそれが私共にも反映して、私共の熱心ともなる次第であります。

私もこの機會に於いて十分お話を申し上げて見たいと思ふのであります。併し今日は私は結婚に參らなければならぬ。結婚と申しても私が結婚をする譯ではありませぬ。もうこの年齢でありますから、とてもさういふ目出度いことはありませんが、私の親友の娘さんが結婚をするのでございます。それにどうしても立會はねばならぬのでありますから、こちらの方は幸ひに本多先生、中村大將、それに又た中野先生

が控へて居られますので、私はホンの少しの時間だけを潰させて戴く次第であります。併し言葉は少いけれども、言ふことは多い積りであります。

私は決して現内閣を攻撃する爲に出て来たのではないのです。今日は舉國一致の秋であつて、そのくらゐのことは、私でも百も承知してゐるのである。併しながら如何に舉國一致と申しましても、何も彼も當局者の言ふことに盲從せねばならぬといふ譯ではありません。そこで私は國民の一人として自分の意見を申し上げて、當局者に若干警告を試みたいと思ふのであります。

御承知の通り、今日日本と支那と戦つて居りますところの土地は、支那であります。併しながら相手は決して支那人でないことは、皆さま方も百も御承知のことと存するのであります。支那人は日本人と戦うて居りますけれども、實は彼等は他の者の爲めに踊らされてゐるやうなものであります。支那人の背後には支那人を踊らせるものが在る。即ち支那人の背後に立つて支那人を、或は進め、或は退け、

或は左に、或は右にと、勝手次第に使ひ廻す者がある。その支那人をさう使ひ廻す者は誰であるか。どこにあるかと言へば二つある。一つは赤い頭巾を被つてゐるものである。これはもう誰も御承知の通りのことである。この赤い頭巾に就ては問題はない。もう一つは黒い頭巾、或は鼠色の頭巾を被つてゐるものである。問題はこれです。かういふ廻りくどいことを申上げずに言へば、支那人を使つてゐるものは、一つはロシア人、ソ聯である。一つは英國である。かう申上げた方がはつきりするであらうと思ひます。英國の尻馬に乗つてゐるものは若干ありますけれども、要するに英國が元兇であります。

然るに日本の將兵は疾風の如く、豪雨の如く、怒濤の如く、戦へば勝ち、攻むれば取るといふ有様で、一箇年を過して、今日は皆さまも御承知の通り、日本版圖の約二倍を占領してゐる次第である。この點に就ては、私共はたゞ感謝あるのみであつて、二の句も出ないのである。然るに一方に於いては此の如く目覺しきことをな



しつゝあるに拘らず、他方に於いてはどうであるか。即ち我が日本の舉國一致などといふ言葉を言ふ間から、非常なる舉國不一致の者が多いのである。それがありまするが故に、支那人に味方して、支那人の後ろ楯となり、支那人の腰を押へ、支那人の尻押しをするところのものを恐れ憚り、それに向つて色目さへも使はうとする者があるのであります。敵を助くる者はやはり敵に相違はないのである。この目前の敵とは戦うてゐるが、敵を助くるものとは妥協しようといふやうなことは、これは論理が許さないことである。然るにその許さない論理を現實に行はうとする者があるのは、實に私はその人々の常識を疑はざるを得ぬのであります。

#### ◇恐英病者と英國の實體

どうしてさういふやうに常識を失うて來たかと言へば、失ふ理由がある。彼等は昔からイギリスといふものを恐がつてゐる。即ち恐英病の患者である。この病人は

なか／＼澤山ある。それが又偉い所にある。一人や二人ならば、彼等を松澤病院なり、どこなりへでも送り込むことが出来る。併しなか／＼我々の手では處分に困るのである。そこで今日皆さま方に向つて我々が訴へて、國論に依つてこの病人の病を治してやりたいと思ふのである。元來、英國は偉い、英國は恐い、英國には敵はないといふことは、維新前から起つたところの考へでありまして、もう殆どその考へは百年續いてゐる。莫迦なことも百年辛抱すれば、もう大概廢さなければならぬのである。然るに昭和の御代に於いて、文久、元治の時から持つてゐた考へを、尙ほ持つてゐるといふことは、あまりに舊式なる考へであります。御承知の通り、イギリス人は人の揮で相撲を取るといふことが、彼等の凡有る十八番である。彼等の政策といふものは虚喝である。言葉の上で人を脅すといふことが、彼等の最も得意とするところのものである。大概の者はその虚喝で參つてしまふのである。「獅子一度吼ゆれば百獸腦破裂す」で、獅子が吼ゆると他の獸は腦が破裂するといふ言葉

がありますが、英國のライオンはたゞ吼ゆることのみを知つてゐる。その吼ゆることとて皆な恐がつて、その爲に腦を破裂させてゐるのである。現に我々の近傍にも半分ばかり腦を破裂させつゝある者がある。

◇獨逸、伊太利の對英強硬

唯だ今日イギリスの虚喝に反抗し、やるならやつて見ろと云つて、敢然として立つた者は誰であるかと云ふと、我々の盟邦であるイタリアのムツソリーニ首相が居る。ドイツのヒットラー總統が居る。是等の人々はイギリス人の本音本性をすつかり見破つて、彼等の虚喝には乗らずして、やるならやつて見ろ、俺共は信ずる所があつてこれだけやるといふことを、實行したのであります。それが即ち今日に於いてエチオピアの征服となり、それが今日に於いてオーストリアの合併となつたのであります。而して御承知の通りイギリスといふ國は、弱い者に對しては非常に強い

が、強い者に對しては又可なり弱いのであります。イギリスとイタリアとはどつちから手を先に出したか、チエンバーレンの方から仲良くならうといつて手紙をやつたのである。その爲には英國に於いて二人とない外務大臣、然も人望のある外務大臣、女からも男からも好く言はれる外務大臣、金持である外務大臣、凡有る色男の資格を備へて居る外務大臣、そのイーデン外相といふものを何時の間にか追つ拂つてしまつたのであります。ムツソリーニ首相が敢然としてやつた爲にそこまで行つて、それを英國では平氣でやつて居る。ヒットラー總統と仲良くなつたのはどちらからであるか。誰が先にハリアファックスをベルリンまで送つたのであるか。これ又英國から手を出したのである。

此の如く明かなる實物教育を目の前に見つゝ、それが分らずに、此方から色目を使つたり、此方から手を差出したり、此方から膝を折つたりするといふのは、さても情ない話であります。私はこれだけは實に遺憾千萬だと思ふのである。

### ◇外交の軟弱

今日のフランスといふ國はどうか。フランスの惡口をいふぢやないが、御承知の通りフランスは最早一等國は自ら辭職してしまつた。何のことはない、英國の尻馬に乗つてさへ行けば宜いと考へて居る。今日に於いて若しボアンカレーを地下より起し、クレマンソーを起したならば、彼等は泣くでありませう。實に情無い國になつて居る。その情無い國が敢然として日本に向つて、海南島を取れば黙つては居ないぞ。西沙島は俺の領分だぞ。斯ういふ風に急に偉くなつて、日本に食つて掛るやうになつたといふことは、皆さま、これは何であると御考へになりますか。これはフランスが急に強くなつたのではない。日本が急に弱くなつたからであります。これ程日本は戦に勝ち、これ程武勳を擧げ、これ程世界に勇名を轟かしつゝあるに拘らず、人の尻馬に乗る第二流國家が、日本に向つて脅し文句を使ふやうになつたと

いふことは、さても情無い話だ。これは畢竟日本が英國に色目を使つた、その足跡を見透かして、フランスがやつて來たのであります。

この位のこととは外交專家である人々が分らぬ筈はないのであります。私は決して我が役人の惡口をいふものではない。役人に怨もなければ何も無い。併しながら國民の一人として、やり方が餘りにも懸隔して居ると思ふ。即ち軍事行動は斯ういふ風に進んで居る。外交では斯ういふ風に退いて居る。これが軍事と外交と左右の手や足の如く互に進んで行つてこそ、初めて國策といふものは全くすることが出来ると思ひます。然るに右の手はこつちに向いて居る、左の手はあつちに向いて居るといふと、餘りにやれば身體は眞二つに裂けるのであります。今日の状態は稍々それではないかと思つて居る。それで出來得ることならば、どうぞ左の手も右の手同様に進みたい。左の足も右の足同様に進みたい。我が外交も我が軍事行動に恥ぢないだけの立派な外交をして欲しい。これが私の願ひであります。

◆英國新聞の曲筆(二)

英國の「マンチエスター・ガーディアン」の持主であり、主筆である、大記者のスコットといふ人が申したことがある。「議論は御勝手次第、併し事實は事實として御書きなさい」これが所謂英國に於ける新聞の原則であります。これが英國が世界に誇る言論の金科玉條であります。然るに今日の英國の新聞を御覧になれば能く分る。皆様も能く御覧になるだらうと思ふ。私も昔ほど澤山讀むことは出来ないけれども、やはり若干讀んで居ります。今日の英國の新聞は全く世界に於ける曲筆の標本になつて居ります。嘘を書く。雪を墨となし、烏を置となし、馬を鹿といふ位の程度ではない。その間違ひは實に傑出して居る。秦の趙高などは今日のロンドン・タイムズを讀んだら、仲々これは後世恐るべしと驚くであらうと思ふ。

それで一々私がそれを讀む必要はありませんが、其の書いた一つの例を申し上げます

すと、これは最近の事でありませぬ。「日本人は廣東に於いて非戦闘員に向つて爆弾を投じて居る。これに反して支那の飛行機は日本の領土に向つては唯だ宣傳文を送つて居る。これを見て如何に兩國が違ふかといふことが分るではないか。」と、まるで支那人は聖人のやうに書いてある。日本人は唯人を殺すことが商賣のやうに書いてある。然るに事實はどうでございますか。上海に於いて非戦闘員、然も自國の人間を勝手次第に爆殺したる者は支那人である。さういふ立派な事實があるに拘らず、日本人は非戦闘員を爆弾で殺すが、支那人は日本には爆弾も投げず、唯だ書付けを降したと書いて居る。さういふ調子で一事が萬事、實に驚き入つたものであります。

◆英國新聞の曲筆(一)

例へば斯ういふことを書いた。これは今のスコット先生の持つて居る「マンチエスター・ガーディアン」といふ新聞である。「總ての支那は一致した決心である。支

那に於ける赤軍の將兵は曰く、我等は魚である。國民は水である。我等は水中を泳ぐ者である』斯ういふことを言つて居る。然るに日本は尙ほ支那を征服せんとして居る。これは歴史に比類なきことである。これは絶対不可能である。斯ういふことを書いて居る。まるで支那の軍隊は義勇軍、仁義に満ちた軍のやうに書いてある。日本人は支那を征服することは断じて出来ない。又さういふ例といふものは歴史にはない。斯ういふことを書いてある。併しながら支那を征服したことは歴史上に於いては澤山例がある。御承知の通り蒙古が支那を征服してこゝに元朝といふものが出来た。滿洲が支那を征服してこゝに愛親覺羅氏の清朝といふものが出来た。六朝の時代には支那は半分以上北方の民族から支配されて居たのである。支那は三千年といはず、殆ど五千年の歴史は異民族の征服の歴史である。何の爲に萬里の長城を築いたかといふことを考へて見れば、これで分るのである。然るに支那は断じて征服は出来ない。又征服せられたることは歴史上ないなどと言ふ。エンサイクロペヂ

アの一冊でも持つて居れば、その位のことはいギリス人にも分る筈である。

#### ◆「廣東の前途」の記述

これからタイムスの通信といふものを少し皆様に御聴きに入れませう。これは六月十八日のタイムスに載つて居る「廣東の前途」といふ題である。これは併し少しどうも痛いこともある。向ふの言ふことも若干當つて居る。私共は正直だからやはり痛いことは痛いと言ふ。負け惜みは言はない。これは「失はれたる機會」と題してある。兎も角も日本は北の方では實に巧くやつたが、どうも南の方ではやり損つて居る。日本人も昨年十二月には愈々廣東を取らうと思つて兵を途中まで出したが、パネー號とかレディ・バードとか、揚子江に於ける英國の砲艦の事件があつた爲に、急に日本は怖氣を出してそれを中止してしまつた。その後今日になつてもう廣東には十分の準備が出来て居る。それで今更日本が再び考へ直して出掛けて來よう

としても、一寸これは手が着けられない。今から考へて見れば、到底廣東は日本人の手に入るべきものではない。斯ういふことを書いてある。正直な所私もこの機會は失つたと思ふ。併しこの機會は又取返すことも出来ると思ふのである。どうか皆様方の御力でこの機會を取返したい。これが本日出掛けた一つの所以であります。

◇支那の滋養灌腸を絶て

御承知の通り今日の支那は醫者の方で申しますれば、滋養灌腸で生きて居るのである。もう支那の口は塞がつて居る。口から物を入れることは出来ないのである。それで滋養灌腸で外の所から滋養物を入れて居るのである。そこを塞ぎさへすれば支那は干物になつてしまふ。我々が故らに骨を折つて支那人を殺すとか、何とかする必要はないのである。唯口さへ塞げばもう支那人がちやんと大往生を遂げるのである。然るに何の恐るゝ所があり、何の憚る所があり、何の爲にその滋養灌腸の口

を塞がないか。塞がないのみならず、却つてその口を護衛でもして居るやうなのは、實に私は譯が分らぬと思ふ。一方は口を塞いで息を止めるかと思ふと、一方では頻りに空氣を入れて呼吸をさせるやうにして居る。これでは戦が長引くといふことは當り前である。戦が長引くといふけれども、長引くのではない、長引かせるのであります。

此の如く戦の長くなつた責任は支那人ではない。やるべきことをやらずに済まして居つた爲に長引くのである。即ち長びかせた人々が當然長期戦争の責任は負ふべきが當り前だと私は思ふのである。斯く長引かすといふことが、イギリスの思ふ盡きに入つて居るのである。イギリスが今日神に祈る所は、日本がどうぞ廣東を取つて呉れるな、支那の滋養灌腸を続けさせて呉れるといふことを祈つて居る。支那人ばかりがイギリスの手で踊つて居るのではなくして、日本人自身がイギリスの手で踊つて居るのである。これでは私は堪らないと思ふ。イギリス人が支那人を踊らせる

位は致し方がないとしても、我が日本人までイギリス人の調子に依つて踊つては、これはやり切れないのである。それでどうか私は皆様の御力で、を止めて戴きたいと思ふのである。

#### ◇東亞を我物顔する英國

私は決してイギリス人が嫌ひといふでもなければ好きといふでもない。唯イギリス人が東亞を我物顔に考へ、まるで東亞はイギリスの縄張りであるかの如く考へて、日本が東亞に於ける一大國として東亞に向つて皇道を宣揚して行くといふことを目の敵にして、それを邪魔して行くといふことが、私にはどうしても勘辨が出来ないといふのであります。それでイギリスがそれさへ止めれば明日からでも、明日を待たず今日からでも、手を握つて行つて宜い。日本の邪魔をしつゝ、アジャに於いては我物顔に振舞ひつゝ、これまで日本が國を擧げて戦つた所の効果は無にしつゝ、

それでイギリスと握手するといふことは、國家を焦土としても私は断然出来ないとであると思ふのであります。

#### ◇交譲妥協を廢す可し

そこで私共は考へねばならない。日本が譲ればイギリスも譲ると御考へになると間違ふ。日本が一足引けばイギリスは一足進んで来る。二足引けば二足進んで来る。故に交譲といふことは決してイギリスとの妥協の途ではない。寧ろ我々も我々の同志のヒットラー總統や、ムツソリーニ首相がやつた如くに、我々が一足進み、二足進む時に於いては、一足進めば向ふから左の手を出し、二足進めば向ふから右の手を出し、四足進めば身體ながら日本に投げ掛けて来る。斯ういふことになるのであります。

それでイギリスと妥協するといふ策も必ずしも悪くはないが、妥協する積りであ

れば、進んで我々が支那に對して致命の傷を與へて、イギリス人が支那を踊らせることの出来ないまでに、徹底的にやつつけるのが、即ち戦を短く切り上げ、東亞の平和を早くなす所以の近道であると、斯う私は信ずる者であります。

(昭和十三年七月十一日 於日比谷公會堂)

## 皇室中心の高揚と恐英病の排撃

### ◇皇室中心主義の高揚

私も及ばずながら永い間文章報國をもつて世に立つてゐる者であります。私が新聞記者として筆を執り出した時は十八歳の時であります。爾來今日迄未だ會て一日と雖も、大いなる事故、若くは病氣を除くの外は、一日として執筆を休んだことがないのであります。今日と雖も不肖ながら尙ほ第一線に立つて、國家重大の問題の時には、如何なる當局者の忌諱も冒し、時としては世論にも逆行して、私の信ずる所を述べてをる次第であります。これは畢竟、私はほかに何も御用に立つことがない。出來得べくんば私の身體も、北支なり、中支なり、或は南支なり、若くはソ満



國境なりに出て、國家に御奉公をすべき人間である。ところが不幸にしてさういふ役目を執るには年既に老いてゐる。せめて生きてゐる間は、自分の最も本職とし、自分の最も長じた點に於いて御奉公をしたいと思ふ以外にございませぬ。どうぞ皆さま方も、私のこの衷情を御洞察下さつて、私がこれから申上げる事について、何なりと御參考になる事があれば、お聽取り願ひたいと思ふのでございます。

私は第一に、皇室中心主義の事を一言申上げて見たい。今日日本國民の中に於いて、天下誰人も皇室中心主義たらざる者あらしやであつて、總ての人がみんな皇室中心主義者である。それに徳富蘇峰何者ぞ、自分一人が皇室中心主義者のやうな顔をして、皇室中心主義の高い旗を掲げて天下に叫ぶといふのはどういふ譯であるかと、或は疑問を發せられる方もあるかも知れませぬ。あるかも知れぬどころではなく、屢々私に向つてさういふことを言はれた方があります。併しながら、善い事であるから、それは言ふに及ばぬといふことであれば、それは洵に困つた事で、例へ

ば「諸惡莫作、衆善奉行」といふことは、誰も知つてゐる。惡事をしてはいけなから善い事をしなければならぬといふことは誰も知つてゐる。で誰も知つてゐるからさういふことを言ふ必要がないといふことであれば、世の中の宗教といふものは總て無用にならなければならぬ。併し世の中に宗教の必要があるといふのは、宗教は人の知らない事を新に教へるのではない。人が知つてゐるけれども、それを行ふ能はざるところのものを呼び醒して、それを實行させるために、宗教の必要があるのです。世の中の誰も知つてゐる事であるからして、それを言ふに及ばずといふことであれば、言論といふものゝ必要はない。言論の必要といふものは、人が知つてゐても或はそれを軽く視、知つてゐても或はそれを忘却し、知つてゐても或はそれを實行しないと云ふ場合に於いて必要である。その意味に於いて、我々は日本國民として皇室中心主義を遵奉すべきものであるべき筈である、又た皇室中心主義を遵奉してゐるべきものであるに拘らず、動もすれば、時にこれを忘却し、

時にこれを閑却し、時としては知りつゝこれを實行しないといふやうなことがあるからして、我々はこゝに常に大いなる皇室中心主義の旗印を掲げて、如何なる場合に於いても、即ち楽しい時に於いても、苦しい時に於いても、天下泰平の時に於いても、天下騷亂の時に於いても、我々國民はこの一點にのみ集まるといふ、大いなる標識を立つる必要を感ずるものである。此の點に於いて私共は、皇室中心主義を常に我々の心に呼び醒し、又これを世間に高調し、これを政治の上にも高調し、これを思想の上にも高調して行かなければならないのであります。これが私共が皇室中心主義を皆さまと共に高く掲げて行く必要を感ずる所以であります。

◇日本國民は皇室中心に一致す

「皇室中心主義は凡有る政黨の上に超越してをるものであります。民政黨の人も、政友會の人も、若くは政黨に屬する人も、屬せざる人も、皆な皇室中心主義の下に

集まるべきものである。政黨をやめて集まれと言ふのではない。精神の上にて集まれと言ふのであります。又た宗教を信ずる人もであります。佛教の中に於いて、親鸞の門徒も、日蓮の門徒も、或は禪にせよ、天台にせよ、眞言にせよ、凡有る佛徒も、若くはキリスト教徒も、若くは凡有る宗教を信じない人も、苟も日本國民である者は、總て皇室中心主義によつて、一致すべきものであります。又た日本國民の中に於いて、或者は資本家であり、或者は労働者である。或者は金持であり、或者は中産者であり、或者は貧乏である。或者は地主であり、或者は小作人である。或者は問屋であり、或者は小賣商である。或者は軍人であり、或者は官吏であり、或者は我々の如き野人である。其等の者が凡有る階級、凡有る職業、總てのものを無視して集まる所は何であるかと言へば、皇室中心主義である。苟も舉國一致といふことはなんで舉國一致をするか。總親和といふことはなんで總親和をするか。悉く我が皇室を中心として國民が集まること、即ち舉國一致である。皇室を中心と

して總ての人が手を握れば、即ちそこに國民の總觀和が出来上るのであります。

◇皇室中心の思想は肇國以來

それで皇室中心主義といふものは、苟も我々が日本國民として世界に立つ上に於いては、又た日本國民として日本の國民を世界に立たしめるといふことを、實行する上に於いては、是非とも必要なものである。即ち我々は日々それを服膺し、拳々これを行つて行くべきところのものである。此に於いて御同様、皆さま方御當地に於ける會員の方々も、恐らくは宗教の思想、政治の思想、經濟の思想、社會的な思想、凡有る點に於いて一致してゐるわけではありますまい。又その嗜好に於いても酒を好く人もあれば、餅を好く人もある。併しながら、凡有る個性を有つてゐるに拘らず、その上に超然としてこゝに一致が出来たといふのは、今申しました通り、皇室中心主義の下に皆さまが集まられたからである。どうか皆さま方も、この主義

によつて此の上とも我が日本國民の國民たる本領を發揮して頂きたいといふのが、私がこゝで敢へて天下に向つて皇室中心主義を叫ぶ所以であります。

この皇室中心主義といふ言葉は、恐らくは私が明治四十年頃世間に叫び出したのが初めであります。併しながら、言葉はその時に初まつたのでありますけれども、その思想は日本開闢以來の思想であり、その言葉の出来る前より、既に日本に存在してをつたのであります。何も私が製造したのではない。總ての人の思想を、極めて簡明に、極めて適切なる皇室中心主義といふ言葉に、これを纏めたゞけのことです。決して私が、皇室中心主義などといふ言葉を拵へたがために、專賣特許を取らうなどといふやうな考へは有たない。要するに私が、皆さまに代つて、かういふ極めて手短い言葉で、極めて深奥、博大なるこゝろの思想を言ひ現すことを提供したに過ぎないのであります。

### ◇ 振古未曾有の大事業

次に私の申し上げて見たい事は、今日の日本であります。今日（昭和十四年五月）の日本は、皆さま方はどういふ風にお考へになつてをるか知りませぬけれども、容易ならぬ状態になつてゐる。我々は黙つて戦をしてゐるけれども、黙つてするのにせよ、大きな聲を立てゝするにせよ、とにかく戦をしてゐる。この戦の大きさはどのくらゐの大きさであるかといふことは、詳しく申し上げますれば、或は軍機に關することもあると思ひますから、遠慮申しまして、詳しくは申しませぬが、たゞ概略を申して見れば、少く共總ての點に於いて日露戦争の十倍の戦をしてゐるのであります。私は日清戦争の時にも従軍した人間であります。日露戦争の時には尙深く政府の樞機に與かつてゐた人間であります。それでどのくらゐの大きさであり、どのくらゐの費用が掛かり、どのくらゐの國民を動員したかといふことを知つてをる。そ

れに比べて見ますれば、今日はその十數倍の戦をやつてゐる。恐らく今日の事變といふものは、神武天皇御東征以來、今日に至るまで、日本の二千六百年の歴史の上に於いて、絶後とは申しませぬが、空前の大事變であります。天智天皇の時代に於いても、聖德太子の時代に於いても、後醍醐天皇の時代に於いても、近くは 孝明天皇、明治天皇の時代に於いても、これほどの大きな仕事をしたことはないのです。これ迄の仕事といふものは、概して日本の国内的な仕事である。偶々外國に關する事がありましたも、漸く朝鮮の一角から、支那の片隅に及んだものに過ぎないのであります。然るに今日はどうかと申しますれば、朝鮮の一角でもない。支那の片隅でもない。殆ど日本はアジア大陸の極めて重要なる要部を全部占めてゐるのである。此の如き大いなる仕事をしてをるといふことは、これは日本のどの歴史の頁をめぐつて見ても、未だ曾てない事である。我々こそ、日々軍隊を送り日々傷病兵を迎へ、若くは日々無言の將士を迎へる。或は勇み、或は喜び、或は悲

しむ。色々な心を以つて、その日／＼を送つてをりますけれども、百年後の歴史を以つて今日を見る時に於いては、實に驚くべき大事業に我々は取掛かつてゐるのであります。

かういふ時代に我々が踏み掛かつてゐるといふことは、これはどうした譯でありませうか。誰がこゝへ日本を引張つて来たか。これは引張つて来たのでもない。實は維新以來、日本の趨勢がこゝまで動いて来たのであります。引張つて来たのではない、動いて来たのである。その動いて来たといふことは何かと言へば、國運の發展、國運の進歩であります。日本といふ大なる國が、恰も北氷洋かき出して大なる氷塊が、暖かになつて来たために、ぼつかり／＼浮んで太平洋中に浮び出したやうに、日本國が浮び出して来たのであります。かういふことは一人一個の力でもない。或は國民總體の力でもない。所謂時勢と、場合と、機會と、人間、天と人とが合體し、時と運とが合體して、初めてこゝに大なるところの大局面を展開して来たの

であります。我々がこゝまで乗出して来たといふことは、誰も持つて来たのではない、自然にこゝに来たのであります。

◇取るにはそれ丈の代價を要す

その理由を申し上げますれば大變面白いのでありますけれども、それを申してをつた日には、お話はそれで盡きるから、それは一寸預けて置きまして、とにかくさういふ工合になつてゐるので、この際我々は多少の悩みを感ずることは當り前であります。世の中で、何の代價も拂はずに物を手に入れようといふ心得の惡い人はない。さういふ不心得な者は天が罰する。泥棒などといふものは、無代價で物を取るやうに考へてゐるけれども、泥棒の仕事といふものも相當骨が折れるに決まつてゐる。私は不幸にしてその經驗を有たないので、これは想像であるし、又皆さまざま御經驗はないだらうが、條理を以つて考へますればその通りであります。世の中に只

取るほど損なものはない。只取るほど高いものはない。ゲーテの言葉にもかうある  
「總ての物は汝の取るにまかす。但しその代價を拂へ」と。代價を拂はずに物を取  
るといふやうな不心得な考へはいけない。我々は今大いなる獲物を取りつゝある。  
この獲物を取つた時に於いては、二千六百年來我々の先祖が未だ曾て見ざりしとこ  
ろの、大いなる國運の發展、大いなる國家の隆昌、大いなる大和民族の膨脹を見るこ  
とが出来るのである。そのためには我々は相當なる代價を拂はなければならぬ。  
私は皆さま方にこの點をよく考への中に置いて頂きたいと思ふのであります。

◇國民總てが生みの惱みに堪へよ

世の中の惱みといふことには二通りある。生の惱みも惱みであれば、死の惱みも  
惱みである。希望の惱みも惱みであれば、失望の惱みも惱みである。愈々今日か明  
日かといふ苦しい病氣の惱みも惱みであれば、御婦人がお産をしてお子さんを持つ

時の惱みも惱みである。總て惱みといふものにも二通りあり、苦しみにも二通りあ  
る。我々の今の惱みは何であるかと申せば、死の惱みでなくして生の惱みである。  
國が大きくならうとする時に於いては、どうしても大きくなるだけの惱みがある。  
恰も婦人が子供を生まんとする時の生の惱みと同じことであります。この惱みとい  
ふものは、我々が齒をくいしばつてでも、目をつむつてでも、どうしてもこれをや  
り通して行かなければならないといふ所に、我々は差掛かつてゐる。でこの情勢に  
際して、私共は、日本國民として、また相當の自省をなし、相當の克己をなし、慎  
むべきところは慎み、戒むべきところは戒め、省みるべきところは省みて、國民た  
るところの義務を盡すに就ては、一點一畫の間違ひないことを期せなければなりま  
せぬが、同時に我が政府に向つても、私はこの註文をしたいと思ふのであります。  
國家多事の時に於いては、國民ばかりが反省して、政府が反省せずによいといふ  
ことはないのである。政府は國民を指導すべき位置に立つてをるからして、寧ろ國

民に先立つて、自らその實例を示さなければならぬ。で私は何れの場合に於いても負擔は公平でなくてはならない。人民だけが苦しんで、政府だけ楽しむ。租税を出す方は苦しんで、租税を使ふ方は湯水の如く使ふなどといふことは、決してあるべき筈ではない。私は決して今日の政府を咎めるのではない、戒めてをる。咎めるといふことは、所謂現在あることを攻撃することが咎めるのである。戒めるといふことは、將來どうぞ氣を付けて貰ひたいといふことであります。

それで今日の日本はさういふ場合になつて來てをる。これから少しお話を進めて何故に日本がさういふ場合になつて來たかといふことを、詳しくは申しませぬけれども、ほんのその一端だけを申上げて見たいと思ひます。

#### ◇十九世紀と東亞の争奪

御承知の通り、世界の歴史といふものは、丁度大きな浪が打つやうなものであ

る。時としては東の浪が西に動いて來る。時としては西の浪が東に動いて來る。丁度中古以來の歴史を考へて見まするのに、中古の歴史に於きましては、東の浪が西に動いて來た。即ちアジアの勢力が遠くヨーロッパに行はれて、一時は殆どヨーロッパを席捲せんとした。成吉思汗もその通り、タメルランもその通り、その他あらゆる者が興つて、トルコ人、もしくは蒙古人、その他のアジア民族がヨーロッパに侵入して、ヨーロッパ人を恐れ且つ戦かしたといふことは、歴史に明らかなるところであります。

然るにその浪が又引つくり返つて、西の浪が漸次東にやつて來た。その最も甚だしい時代が、即ち十九世紀の時代である。十九世紀の時代といふものは、皆さう方が御承知の通り、さう古い時代ではない。かく申す私なども、實は十九世紀の男であります。このやうに十九世紀といふものはさう昔のことではない。この間のことである。その十九世紀の時代といふものがどうであるかと首へば、即ちナポレオン

の没落後、ペルリが日本に來た頃まで、若くはその後まで、更に言ふならば、イギリスに於いては南阿戦争の始まる頃まで、その間の百年間でありませう。この百年間に於きまして、西の勢力が段々東へ來た。その中に於いても最も勢力を發展せしめたのはイギリスであります。それに連れてフランスもやつて來るし、更に又ロシアもやつて來たのであります。

このやうにしまして、十九世紀といふものは、ヨーロッパの勢力がアジアに及んだ時代であつた。御承知のやうにアフリカもその當時丁度西瓜を切るやうに、すかさず切つて、みんな分けてしまつたのであります。併しながらアフリカといふ處は未墾の地である。此處は誰の處、此處は誰の處といふ風に、銘々持主の札を立てなければ、何も役に立たない砂つ原に札を立てたやうな處が多い。これに反してアジアは、山もあり、畑もあり、田もあり、池もあり、川もあるといふ風に、立派に開墾の出來た處である。それでアフリカを取つても取り甲斐がないが、アジア

は一尺取れば一尺の利益がある。一寸取れば一寸の利益があるから、恰も蟻が甘いものに集まる如く、蜜蜂が花に集まる如く、蠅が汚いものに集まる如く、みんな寄つてアジアを取りに來たのである。所謂ヨーロッパの連中は胡麻の蠅とでも言つてよろしいものであります。

#### ◇英國の東亞侵略

この胡麻の蠅の中で、一番巨魁がイギリスであります。イギリスの事を詳しく申せば、これはもう時間が幾らあつても足りない。英國罪惡史などといふものを書けと言はれたら、私は原稿料なんか取らずに書いてもよいと思つてゐる。たゞ時間が無いからどうも書くことが出來ない。洵に残念である。もう少し私が若ければ「近世日本國民史」を書いた後には英國罪惡史を書いてよいのであるが、もうかう年が寄つては一寸書けない。でたゞ結論だけを申して見ますれば、英國は全く世界を



食ひものにした。世界の六分の一を食つたのでありますから、よほど食つたものであります。そのうちの主なる食料はアジアである。十九世紀にイギリスが東洋へやつて来て、殆ど支那を侵し、やがて日本に及ぼしたのであります。更にこのイギリスの勢力と共に来たところの、ロシアの勢力、フランスの勢力、これらの勢力がやつて来た時に於いては、アジアを殆ど風靡して来た。印度をやり、ベルシャをやり、終ひには印度の傍にあるところのビルマとか、安南とか、シヤム（現在は泰國）とかいふやうな國もみんなやられて、残つてゐる所は支那と日本になつたが、その支那も遂には殆どやられてしまつた。結局その時に於いてたつた一人残つたのが日本である。若しその場合日本もそのまゝやられてしまつてをたならば、今日のやうなことはないのであります。

#### ◇日本の儼存と東亞の自覺

世界の情勢といふものは、まるで水の流れのやうなものである。この時には西の方から水が流れて来た。洪水のやうな勢でどん／＼押しして来たのであるが、それに對して日本といふものが一つの大きいなる堤防の役を勤め、こゝでその洪水を堰き止めたのであります。さうして水がこの堰を越すか越さぬかとかういふ風になつて来た時に、段々こつちの堤防が高くなつて来たからして、今度はこゝまで押しして来たところの水が、又西の方へ流れて行かなければならぬやうになつた。これが即ち世界の大變化である。誰が世界の趨勢をこの様に引つくり返したかと言へば、日本が引つくり返したのである。日本が西洋の言ふことを聽いて、支那の如く西洋に頭を下げて神妙にしてをたしたたら、もうアジアの問題はとつくの昔に片附いてしまつてをる。併しながら日本は、中々一寸の蟲にも五分の魂ぐらゐではない。魂の方が身體よりも百倍も大きいのであります。さういふ氣概を有つてゐたからして、西洋人に對し頭を下げぬばかりでなく、腕で来るなら腕で來い、智慧で来るなら智

慧で来い、力で来るなら力で来い、分別で来るなら分別で来い、つまりなんでも来いといふ譯で、日本が儼然として立つて見せた。そこで支那もこれでは俺達も考へなければならぬと言つて、支那人も考へた。更に印度人も考へた。ペルシャ人も考へた。トルコ人も考へた。アラビヤ人も考へた。エチオピア人も考へた。總ての者が考へてずつと向きを變へた。それまでは東の方を向いて押されて来たのが、日本が一反断乎として立つたから、總てのアジヤ民族はみんな廻れ右をして、西に向き直つたのであります。これが世界の變化であります。

#### ◇日本の重大責任

それで世界にかういふ騒ぎを起した本家本元は日本である。今日我々がかういふ事をやつてゐるのは自業自得である。誰が始めてくれと言つて始めたのではない。お腹が大きくなつたのは他人の力で大きくなつたのではない。自分達の力でお腹を

大きくしたやうなものである。これを安産させる責任は、やはりお腹を大きくした二人が責任を負はなければならない。お腹が大きくなつてゐるのを、知らん顔して放つて置くといふことは出来ないであります。日本の今日の生の悩みをこゝまで引摺つて来たのは、これまでの日本の歴史がさういふ風にして来たのであるから、これからは否でも應でも、どんなことをしても、断乎としてこれに對處して行かなければならない。これが今日の態勢であると信ずるのであります。

#### ◇日英關係とウイリアム・アダムス

そこでこの際英國との關係を少し申上げて見たい。これは罪惡史ではなくて、日英關係史といふことを、少しばかり申上げて見たい。日本と英國とは、なか／＼永い關係がある。英國と日本が初めて關係を有つたのは、徳川家康の時代であります。御承知の通り、英國の船乗でもあり、造船家でもあるところのウイリアム・アダム

スといふ者が、オランダ船に乗つて日本へやつて来た。その船は五艘ばかり来たのであるけれども、四艘は日本に到着し得ずして、ウィリアム・アダムスの乗つた船だけが日本に到着した。それが丁度關ヶ原の戦の翌年ぐらゐ、慶長五年頃と私は覺えてゐる。それ以來ウィリアム・アダムスは徳川家康の顧問となつて、家康に色々な事を教へたといふことが彼の手紙に書いてある。色々な事を家康が聞いたから教へた。新しい造船の事も教へ、天文の知識も教へ、數學も教へ、幾何まで教へたといふことが書いてある。けれども家康が幾何を習つたといふことはどうも怪しい。家康もなか／＼心の計算は確かであつたけれども、數學の方で行けば、今日の小學校にも追入れないかも知れぬ。あの人は、御承知の通り、勘定の喧しい人である。その喧しいといふのは、出す方でなくして、取る方の勘定が喧しい人である。割算でもなければ引算でもない。加算ばかりやつてをつた。加減乗除と言ふけれども、加へることだけしかやらない。それで數學の知識は極めて簡單明瞭であります。即

ち十といふ時には自分の両手で數へ、二十といふ時には足を出して數へ、三十といふ時妻の手を數へ、四十といふ時にはその足を數へる。お妻さんを幾人も有つてゐたから、其等の手足を算盤珠に應用したのでありまして、十分數學の知識などなかつたらしい。併しウィリアム・アダムスの書いたのには、幾何學も教へたと書いてある。多分自分が習はなかつたけれども、誰かに習はしたのであらうと思ひます。それはとにかくとして、その後ウィリアム・アダムスは相州横須賀の逸見といふ處に住地を貰ひ、名も三浦按針と改め、日本婦人を妻として一家を立て、家康のためには澤山船を造つてをります。このやうに、日本とイギリスとは可なり昔から關係がある。それで大阪城の戦の時には、イギリスの商人が軍需品を家康に賣込んでゐる。彈丸とか火藥とかいふものを家康の方では買上げてゐるのであつて、イギリスと日本との關係は可なり古いのであります。それから平戸に商館を置いて、クックといふ漢が来て商賣をやつてゐる。まあかうした事の経緯を話すと長くなるから申

しませぬが、とにかくかういふ風にしてイギリスは、始終それからといふものは日本に目を着けてゐたのであります。

#### ◇阿片戦争と日本の恐怖

ところが日本がオランダと關係するやうになつてからは、オランダが始終イギリスの邪魔をした。イギリスがやつて來ようとする、あれは耶穌教だからいけないなどといふことを言つて、始終イギリスを讒訴して來た。そこでイギリスは當分寄りつかなかつたのですが、その後天保年間になつて、御承知の通り支那では阿片戦争といふものがあつた。これはイギリスの罪惡史の中でも最も大きな一つの例であります。イギリスの商人が、イギリス官吏の尻押でもつて、印度から阿片を支那へ持つて來て、支那政府がそれを賣ることは出來ぬと言つて禁止してゐるに拘らず、賣つたのであります。そこで支那の湖廣總督林則徐といふ人が、その阿片を沒收して

全部焼いてしまつたのであります。その結果は、即ち御承知の通り阿片戦争といふものになつて、待つてましたと言はんばかりに、イギリスから戦争を仕掛けた。さうしてその時分の支那といふものは、今よりも十倍も百倍も弱かつたから、まるで枯木を折るよりも易くやつつけられてしまつて、五個處の港を開いたのであります。上海、香港、廈門、寧波、さういふ處を開いて、さうしてイギリス人の根據地としたのであります。更に尙ほ機會ある毎に、イギリス人は何かと支那を虐めて來たのであります。

そこで日本では、もうイギリスが支那をやつたといふことが早くから分つてゐたので、こいつが日本へ來てはやり切れなまいふことで非常に心配した。そのためその時分の日本の識者はロシアと同盟しようか、イギリスと同盟しようかといふやうな考慮までも拂つて、色々やつて來たのであります。併しながら日本ではどうかと言ふと、一方ではアメリカと談判中であつた。ハリスが言ふのには、「早く私

の方と御調印なさい。今私と調印して置かなければ、この次にはイギリスのオルコックがやつて來ますぞ。さうしてイギリスの使節がやつて來た時には、どういふ無理難題を言ふかも知れない。私と調印さへして置けば、私以上の事を註文することは出來ない。それであなた方は自衛のためと思へば早く私の言ふことをお聞きなさい」と、まあ言うて見れば、私はあなた方の羽織だけで辛抱するけれども、イギリスが來ればシャツまで刺ぎますぞ、早く羽織を脱ぎなさいといふ譯です。親切であるか、親切ごかしであるか、それは銘々の判断にお任せします。或は半分々々であつたかも知れない。それで井伊直弼などといふ連中は、それでは困るといふことで調印したのであつて、實はアメリカとの調印といふものは、イギリスがさせたやうなものである。井伊直弼の騒ぎも、イギリスが支那で騒いだ結果、その餘波を受けてあゝいふことになつたのであります。かういふ風にイギリスの勢力といふものは強かつた。それでイギリスがまだ日本へ來ない前から、イギリスといふ國は怖い國だ

といふことを、日本人は十分知つてゐたのであります。今日、恐英病などと言つてイギリスを怖がつてはいかぬと言ふけれども、その病氣は昨日引いたやうな鼻風邪ではない。もう結核の三期になつてをるぐらゐである。殆ど百年ほども前から、恐英病の微菌が日本人に深く植ゑ付けられてゐる。イギリスが來ますぞといふ言葉一つで、さうなつて來たのであります。

#### ◇維新以來の英國と其の狡猾

さて愈々その後、慶應年間にイギリスのバークスといふ漢がやつて來たものですから、日本はもうイギリスを頼りにして行くよりほか仕方がなかつた。御承知の通り、その時分は幕府の方はフランスがやつてをる。薩長の方はイギリスがやつてゐた。それで幕府と薩長との争といふものは、或る意味から言ふとフランスとイギリスの争になつてゐた様であります。さうして幕府が負けて薩長が勝つたから、イギ

リスの勢力といふものが、日本に及ぶところ甚だ大なるものがあつたのであります。此の如くしてイギリスがやつて来た。さうして御承知の通り遂には日英同盟となり、國際聯盟となり、滿洲事變となり、北支事變となつて、今日の支那事變となつてゐるのであります。

此の様に日本とイギリスとの因縁といふものはなかく深いものである。一々これを申上げて見れば數限りもない。併しながらこのイギリスといふ國の御馳走は、殆ど百年の長きに亘つて喰べて見たからして、我々も甘いものは甘い、苦いものは苦い、藥は藥、毒は毒といふ風に、よく分析して知るべき筈である。然るに知るべき筈であるものを知らず、相も變らず毒を藥として呑み、イギリス人の言ふことでさへあれば、難有く心得てをるやうな者があることは、洵に以つてこれは遺憾千萬である。尤もこれは歴史上の結果としては致し方がない。併しながら我々は、イギリス人の世話になつたこともなければ、イギリス人からしてさほど物を習つたこと

もないからして、公平な立場よりイギリスを見るに、凡そ世界各國に於いて、誰もが利己主義であるけれども、ものには程度がある。同じ利己主義にも程度がある。同じ慾張にも程度がある。同じ我儘にも程度がある。然るに世界に於いて凡そ利己主義の標本、利己主義の手本といふものは、何處にあるかと言へば、それは英國である。まあこのくらゐ利己主義の手本といふものは他にない。自分の國さへよければ、さのふまで同盟であらうがあつとも構はない。日本では、一ぺん手を握ると、これから絶交すると言へばともかく、それを言はないうちはどこまでもやはり手を繋いで行く。併しイギリス人は、一方では手を繋いでゐて、片一方の手では背中を短刀で刺すといふ位なことは當り前である。平氣でやつてゐるのであります。

◇ワシントン會議の裏切り

それは何であるかと言ふと、御承知の通り、世界戦争の終つた時に於いて、日英

同盟が第三回の改訂を経た後であつたに拘らず、英國では、もう日本が今では頭を擡げ過ぎる、日本の頭を叩かなけりやいかぬ、叩くためにはアメリカと一緒にやつてやつつけようといふことになつた。あのワシントン會議といふものは、實はイギリスとアメリカとが相談をして、日本をワシントンへ呼出し、二つの國が力を協せて日本を丸裸にするために打つた芝居である。それを日本では、正直に考へて、同盟のイギリスが控へてゐるから、今度の會議は決して心配に及ばないと自分獨りで決めて、のこ／＼出掛けて行つた。これこそ本當の意味の獨善主義であります。自分獨り善い心になつて出掛けて行き、さうして向ふでひどい目に遭はされても、それをひどいとも考へずに歸つて来る。私は決して過激な議論をするのではない。イギリス人がちやんとその通り書いてゐる。日本の莫迦野郎がかういふことになつたといふことを、イギリスの本にちやんと書いてある。若しあなた方が、私の言ふたことが疑はしいとも考へになるならば、その時に日本の外務省から大使として

ローツバに出掛けてをられた本多熊太郎といふ人の書いた文をお讀みになればよしい。確かその事が書いてある。それも本多君が自分で書いたのではない。イギリスの有力なる外交官が書いたところの文書によつて書いたのであるからして、向ふがその通りに言つてをるのを、此方が強ひて言はないと辯護する必要はない。向ふが莫迦野郎と言つたと云へば、さうか位は言つても私は差支ないと思ひます。

#### ◇英國外交の常套手段

それでイギリスのやり方といふものは一體どういふ風な外交かといふことを、極くざつと申し上げます。イギリスでは、自分より少し頭を擡げようとする國は必ずそれを叩くといふことが、イギリスの外交の謂はゞ十八番であります。それで昔からイスパニヤが偉いといふ時に於いては、オランダの力を藉り、フランスの力を藉りて、イスパニヤを叩く。又フランスが偉いといふ時に於いては、ロシアの力、ドイ

ツの力を藉りてこれを叩く。ドイツが偉いといふ時に於いては、フランスの力、アメリカの力、日本の力、ロシアの力を藉りてこれを叩く。ロシアが偉いといふ時に於いては、日本の力を藉りてこれを叩く。總て少し偉くなれば、友達であらうが何であらうがそれを叩く。又偉くならうとしても叩く。例へば、イギリスとフランスは世界大戦の時には、共に死生を同じくしたものであります。然るに世界大戦の後には、フランスが少し勢を出してヨーロッパの諸小國を纏めたといふ時になれば、イギリスが早速やきもちを焼いて、これまで敵としたところのドイツと手を握るぞといふ氣勢を示して、フランスを押へ附けたのであります。更に世界大戦の後、日本が少しアジアで偉くならうとしたら、アメリカの力を藉りて日本を押へ附けたのであります。これがイギリスの一つの手であります。

◇他を道伴れとする英國

又イギリスの外交といふものは、如何なる場合でも自分一人ではしない。必ず人と共にやる。さうして人と共にやる時には、なるべく人に苦勞を餘計させて、利益は自分の方が多く取るといふ方針で進んでゐる。これは洵に都合のよい方針であります。譬へて言へば、栗の毬を剥ぐのは人にやらせて、中の實を喰べるだけの勞力を自分がやる。かういふ譯であります。魚を獲る時に於いても、獲るだけはお前やれ、その代り喰べるのは俺がする。かういふ風な分業の仕方をしてゐるのであつて、それが又洵に上手にやつてゐる。日英同盟も、御承知の通り、明治三十五年頃からいつと四十年の終り、大正に掛けて、これは三度改訂して長く續いた。併しながらイギリスが日本のために働いたこと、日本がイギリスのために働いたこと、どちらが多いか。それはとてもお話にならないほど日本の方が餘計働いてゐる。皆さま方もどうぞそこをよくお考へにならなければいけない。イギリスのやることといふものは、實に當てにならないのであります。



### ◇英國の虚喝

即ちイギリスのやり方といふものはどうであるか。第一に虚喝である。たゞ大きな聲でどなつてをるといふことも虚喝。威すといふことも虚喝。イギリスが加勢するからなどと言つても、本當に加勢すると思つてやつたらやりきれない。これも私が言うたのではない。今日のイギリスのデーリー・メール新聞社長である子爵ロサミア卿が「何だ、俺の國の奴等は始終人を騙してゐる。みんな口先で騙して来て、ひどい目に遭はしてをるではないか。エチオピアの王様はどうだ。エチオピアに對してイギリスがあれほど加勢すると言つて置きながら、愈々獨立を危くする時にはイギリスから兵隊まで出して加勢すると言つて置きながら、イタリヤと戦つた時には、何一つ加勢をしないばかりでなく、負けてロンドンへ來ても、唾も吐き掛けぬではないか。憐むべきエチオピア王、汝はイギリス人を信用して今や流浪の身とな

つた」と此の様に言つてゐる。ギリシヤはどうか。ギリシヤも、イギリス人がいざといふ時には加勢すると言ふから、一所懸命になつてトルコと戦争をしたが、イギリス人は兵隊を一つも送らない。たゞ大きな聲でロンドンの新聞が毎日社説で應援してゐるだけ。そのため遂にギリシヤはトルコからやつつけられてゐる。デンマルクはどうか。イギリスが非常な味方をしてゐるから、特にこれはイギリスとは親類の間柄であるから、きつと加勢すると思つてやつたところが、到頭そのためにプロイセンからして挽取られてしまつた。それでもイギリス人は知らん顔をしてゐる。「小國が大國と争へば負けても致し方がないではないか」と、かういふことを言つてをる。總て其の通りである。イギリスが加勢すると言つても、なか／＼本當にしたことがない。全くないことはない。偶にはある。世界大戦の時には餘儀なくすることになつたけれ共、さういふことは十のうち一つか二つ、八つまではみんな所謂空手形である。手形を幾ら出しても、支拂をしない。出すきりであります。

◇當てにならぬ英國

威しもその手である。御承知の通り、日本が國際聯盟を脱退するその前、滿洲事變の時なども偉い劍幕でイギリスが掛かつて來たから、何れ何とか御沙汰があるだらうと思つたが、泣寝入で、何もしない。イタリアに向つてもえらい勢で、態々地中海艦隊まで動員して見たが、いつの間にかこそく逃げてしまつた。虚喝といふのがイギリスの十八番であつて、この虚喝に大概やられてゐる。世の中にこれほど安いことはない。虚喝で事が行はれて行けば、洵に樂であります。併しイギリスはそれで通して來たのであります。これはイギリスが狡猾であるといふよりも、イギリスをしてさうさせたところの各國がみんな莫迦だつたのである。もう大概その夢も醒めなければならぬ。今日が即ち醒め時であります。イギリス人が何と言はうと、今日蔣介石をやりつけてゐるからいゝが、若し蔣介石を寛大にやつて御覽なさい。

い。日本政府が假に少しでも手を緩めて御覽なさい。英國は蔣介石に對して、日本が手を緩めたのは俺が加勢をしたからだ。さあこれからやれ〜と、まあかういふ風にやる。イギリスほど信用の出來ない國はない。ビスマルクが會てかう言つた、「個人としてはイギリス人ほど信用すべき人はない。併し國家としてはこれほど當てにならぬ國はない」と。ビスマルクも相當な人間であります。そのビスマルクが匙を投げたくらゐるイギリスであるから、我々もイギリスに對しては、眉に唾を付けて考へなければならぬのであります。イギリスの言ふことでさへあれば、金科玉條で、イギリス人に導かれて行きさへすれば安心だと思つても、どこに連れて行かれるか分らない。我々は自分で道を開いて行かなければ、イギリス人の指導によつて動いて行くのでは、どこの藪に這入るか分らない。私はよく皆さま方がこれらの點についてお考へになられんことを望んで止まないであります。

### ◇第一次世界大戦と伊太利の苦杯

大體私のお話し申上げた事はお分りになつたであらうと思ひますが、最後に一言申上げたい。今日ドイツ、イタリアがこの勢をなしたといふことはどういふ譯か。イタリアは御承知の通りイギリスの空手形を食つて、食つた揚句かうなつたのであります。イタリアといふ國は、世界大戦の時には當然ドイツに加擔すべき國であつた。然るにイギリスからして、『まあ野暮を言ふな。ものは損得の勘定だ。俺共の方に附け。お前さん、ドイツに附いたといつて、假に勝つたとしても何が貰へるか。お前さんの隣國はオーストリアだ。オーストリアはドイツにとつて兄弟國である。オーストリア國から分けてやるといふことが出来なければお前さん手ぶらだ。俺等の方に加勢をすればオーストリアを潰すのだ。潰してから先は股を取るなり、或は背を取るなり、肩を取るなり、お前の好きな所を分けてやるから、さあこつちへ來

』といふので出來たのがロンドン條約であります。イタリアでも、苦しいと思つたけれども、欲しいがためにイギリスに味方をして戦をした。併しそのためにイタリアはひどい損害を受けた。御承知の通り、イタリアの兵を失つたことは大したものである。無論金もなかつたので非常な借金をした。さうしてまあ結局戦争に勝つたからして、ヴェルサイユ會議といふことになつた。その時ビツグ・フォアといふ譯で四人の大きな人物が出來た。一人はアメリカ大統領ウイルソン、一人はイギリス首相ロイド・ジョージ、一人はフランス首相クレマンソー、一人はイタリア外相オルランド、かういふ人々が寄つて相談を始め、愈々イタリア外相オルランドが約束手形を出して『どうぞ宜しく』と言つた時、『さういふ話は知らない』と言ひ出したのがウイルソンである。『さういふ手形を俺は聞いてゐなかつた』とかう云つた。その際イギリスが『いや、それは私との間にさういふ約束があつたのだ』と、かう一口言つてやればよいものを、知らん顔をしてゐる。イタリアがどうなつても

構はぬといふ態度であつた。イタリアの代表も色々やつて見たけれども、話が段々面倒になるばかりなので、オランダは憤然色をなし、かういふ席には自分は居られないと言つて、國へ歸つてしまつた。この點はイタリア人も、稍々日本人に似てゐる。ところが残つた連中は、却つてよい按配ぐらゐに考へて、居らなければ仕方がない、缺席裁判で行かうといふ譯で、イタリアを加へずにつきかりやつてしまつた。つまりイタリアは、戦はする、兵隊は殺す、金はなくなる、貰ふものは貰へないといふ譯で、働き損になつてしまつたのであります。

そこでイタリアの政府は固より潰れた。併しながら政府は潰れても、國民は承知することが出来ないから、みんなやけのかんばちになつて、さうして資本家に食つて掛かつたのであります。もう誰も相手が無いから、金持に食つて掛かつて、資本家を追出すといふことになつた。資本家に、お前さん方こそを一つてくれては困る、後は俺等がやるといふことで、労働者が資本家を追出して、全く赤化主義のイ

タリアとなり、國內はもう亂麻の如くなつた。この時に慨然として起つたのが誰かと言ふと、現在のムッソリーニ首相であります。これぢやいかぬといふことで、ムッソリーニが考へて、これは根本から國をやり直さなければならぬ。それにはどうしてやり直すか。つまりみんなが権利などといふことを言ふのが間違ひである、イタリアは國を第一として、國民はたと國に總てのものを捧げるといふ決心でやる、権利とか利得とかいふやうな考へを有つてはいかぬといふことで、すつかり國を建て直して、今日の勢を示すに至つたのであります。

#### ◇獨逸の甦生

それからドイツはどうであるか。御承知の通り、これもお話すれば長くなるけれども、ドイツは決して戦に負けたのではない。戦には勝つた。ドイツの領土内に敵兵が一人も這入つてゐない。それほど戦に勝つてどうしてあゝなつたかと言ふと、

第一ドイツは食料に窮したからであります。第二にドイツ人の思想が悪宣傳によつて悪化したからであります。所謂ドイツは物質的な国防は充實してゐたけれども、精神的な国防に於いて缺けてゐたのであります。そのためにドイツの海軍からして騒ぎが起つて、これ又た國內が亂麻の如くなつた。従つて内がもてないから外ももてないといふことになつて、赤化主義のためやつさもつさしてをる時、これではいかぬ、ドイツとして今は権利だとか、自由だとか言ふべき時ではない、ドイツ民族の主義といふものを第一に確立しなければいかぬといふことでもつて、初めてナチスが起つて來たのであります。それで愈々ナチスが政權を取つてから、漸くまた五年過ぎて六年目になつたばかりであります、今日見るやうな面目を一新するに至つたのであります。

#### ◇日本を手本とした獨伊兩國

然らば彼等が此の如くなつたといふのは何かと言へば、一つは所謂英國流の自由主義、民主主義といふものゝ行詰りであるといふこと、一つはドイツ、イタリアが日本を手本として、日本の真似をしたことである。日本人は、イタリアは偉い、ドイツは偉いと言つて、頻りに餘所の國に感心してゐるけれども、ムツソリーニ首相は誰を手本にして來たか。ヒットラー總統は誰を手本にして來たか。總て日本を手本として來たのであります。權利思想、個人思想、自由思想といふものは、到底國家を隆昌ならしめる所以ではないといふことを、彼等は經驗によつてこれを熟知した。それならば國を強くし、國威を昂めるについては、どうすればよいか。それは國民が一致しなければならぬ。國家を統一しなければならぬ。國民の力を一方に傾けて行かなければならぬ。而してこれについて何處を手本とするか。それは日本である。日本を見よ、日清戦役の時にはどうか。日露戦争の時にはどうか。滿洲事變の時にはどうか。日本は如何なる國である。こゝによい手本があるといふ

ので、ドイツはドイツ流に日本を倣ひ、イタリアはイタリア流に日本を倣つて、彼等は今日はその道の熟練者となつてゐる。我々は二人のよい弟子を有つてゐるのであります。然るにこの御主人様はあまりにお目出たい。さういふ弟子を有つてゐながら、何だか餘所に先生が二人出来たやうに考へてゐる。實際は先生ぢやない、弟子である。そこを考へなければならぬ。それで日本がこの二國と手を繋いで防共協定を強化して行くといふことは、二人の弟子を兩方の脇に挟んで行くといふことである。日本が二人に引張られて行くといふのではない。彼等を引張つて行くのであります。此の點を國民がはつきりしない以上、防共協定強化といふ問題も分る筈がないといふことを、皆さまよく御承知になつて置いて頂きたいのであります。

◇日本精神を研究する獨伊

不肖私も、この協定の出来る時からして、又これを強化する上に於きましても、及

ばずながら多少の努力をしてゐる積りであります。でこれらの點についてはよく心得てゐる。彼等イタリア人、ドイツ人は、何か日本に秘密がありはしないか、國力をかういふ風に一致させるには秘密がありはせないかといふことを非常に考へてゐる。そのためにヒットラー總統の如きは、國家の力ではない、自分個人のポケットから金を出して、態々日本へそれが調査に人を派遣してゐるからあります。何か日本から前達習つて來い、覚えて來い。何處かに日本精神といふものゝ所在がなければならぬ。それを學んで來いと言つて、頻りに研究をさせてゐる。私もドイツ人やイタリア人に多少友人があるので、彼等が屢々私の所へ質問に出掛けて來る。その度に私は言つてやる。それは何でもありません。皇室中心主義であると言つて、私は彼等に皇室中心主義の講釋をして聽かせるのであります。この間ドイツからして新聞記者が十四人來た。その十四人の中の團長は元エムデンの艦長をしてゐた豫備海軍大佐で相當な人間であります。その他の人もみんな相當な人間であります。

それらの人を集めて、私は皇室中心主義の話をした。話ばかりでは足りないからして、ドイツ文に翻譯することになったのでありますが、多分もう出来てゐるだらうと思ひます。極めて短いのでありますけれども、私はよほど申上げたつもりであります。

◇日本は皇室中心以外に何物も無し

即ち私の言つたことは、私共の國はいかなる場合でも、いざとなると總ての物を天子様に差上げるといふのが私共の精神である。命が御入用であれば命を差上げる。財産が御入用であれば財産を差上げる。この點に於いて日本は一致してゐるのである。甚だ遺憾な事であるが、今日の日本は、これほどの大きな仕事をしてゐるのに、あなた方の國のヒットラー總統や、ムツソリーニ首相に比較せられるべきところの政治家が不幸にして見附からぬ。これは私甚だ残念に思ふ。併しながら日本

に決して種がないのではない。過去には兩君以上の人物が澤山ある。將來にも恐らく澤山出るであらう。たゞ今日のところ悲しいかなゐない。丁度あなた達はゐない時に日本へ来たのだ。併しその二人のやうな人がゐなくとも、日本の國民は時計の針の廻る如く、秩序整然大いなる仕事をなし、間違もなく、危険もなく、當り前の事を當り前として進行して行くのはどういふ譯か。これは我々は萬世一系の皇室を戴いて、天子様のためには國民が總て忠誠を效す決心を有つてゐるからである。

それであなた方の國は洵に結構な國であるが、併しあなた方の國のムツソリーニ首相が亡くなつた先はどうであるか。ヒットラー總統が亡くなつた先はどうであるか。恐らくは立派な後繼者が出られるであらうといふことは疑ひないが、何となく私は心配に堪へないものがある。私共の國には、英雄が出ればこれより仕合はないが、よしんば出なくとも何等心配することはないから、どうか安心してくれと、かと言つたのであります。今日のお話はこれで終ります。(昭和十四年五月二十三日於加古川)

## 皇政維新の理想と亞細亞の興隆

### ◇比類無き皇軍の大勝利

本題に入ります前に、少し申上げて見たいことがあります。今日は御同様、廣東の陥落と云ひ、武漢三鎮の完全なる占領と云ひ、寔に我が帝國の武勳は赫々として、世界を驚かして居るのであります。此の如く極めて短時間に於いて、且つ極めて我に於いて不利益なる條件の下に於いて、然も古今に比類なき大戦略を以つて、大勝利を得たと云ふことは、古今の戦史に於いても、全く其の例がないとは言へぬかも知れませんが、比類稀なる大勝利であつて、御同様慶祝の至に堪へぬ次第であります。

併しながら、戦争は單に相撲の如きものではありません。相撲は勝つて相手を倒さへすればよい。相手を土俵の外に押しさへすればよい。それで一切の結論がつくのでありますが、戦争の結論は、敵に勝つたと云つても、それが結論ではありません。勝つたと云ふことは軍序論であつて、結論ではない。世の中で戦争といふものを、單に國技館に於ける相撲道のやうに考へ、唯だ敵を倒したことのみに我が事終ると云ふ風に考へることは、これは非常なる間違ひである。世の中には戦争には勝つて、さうして戦争の結果を失つたものが澤山あります。

### ◇楚の項羽とカール十二世の例

御承知の通り、支那に於ても漢楚の戦で、楚の項羽と云ふ人は、七十餘度戦つて未だ嘗つて敗を取つたことがない。然るに最後の戦に於いて遂に敗れて、何時も軍さに敗れてゐたところの、漢の高祖が天下を取つたのである。又たスエーデンの



カール十二世は、ロシアのペーター大帝と屢々戦つて屢々勝つた。何時もペーター大帝は敗れた。然るに最後にどうであつたかと云へば、カール十二世は遂に敗れて、スエーデンにも居ることが出来ず、他國に流竄の身となつてしまつた。さう云ふ例を挙げますと、古今澤山あるのである。我々もこれ程の大いなる勝利を得て、此の勝利の後をどうするか。即ち戦捷の効果を如何にして我々は獲得するかと云ふことは、これから大問題であつて、寧ろ我々の心配することは、今後の戦捷の結果を如何にすべきかと云ふ問題であらうと思ふのであります。これについては當局者もいろ／＼の考へを有つて居られるだらうと思ひますが、御同様に於いては、此の際是非考へて置かなければならぬことが二つあります。

—258—

#### ◇恐英病の一掃

それは第一は恐英病と云ふものを、此の際に於いて斷乎として一掃しなければならぬ。

即ちイギリスを恐れると云ふ病氣を、此の際皆退治して置かなければならぬ。高熱か微熱かそれは其の人に依つて違ひますが、日本國民のたいていの人が、大なり小なり、恐英病に罹つて居ない者は殆んどないのである。甚だ心外な次第でありますけれども、斯く申す私も、或は曾つて恐英病者の一人で、病氣を幾らか未だ持つて居るぢやないかと思ふ位であります。御列席の方々と雖も、恐らくは若干は持つて居られはしないかと思ひます。それはどう云ふ譯かと云へば、此の病氣は非常なる力を以つて、日本を侵して來たのであります。維新史の初めから恐英病があつたのであります。ずん／＼ずん／＼八十年間に亘つて、此の病氣を養つて來たのである。病菌の所有者ばかりでなく、病菌の養育所もあつた位で、盛んにそれを養つて來たのであります。それで此の病氣の爲に、偶には得をしたこともあります。廣東が取れたなどと云ふことも、實は此の爲であつたかも知れませぬ。併し廣東の取れることの遅れたのも、此の爲であつたかも知れませぬ。若し日本人が恐英

—259—

INT 542

INT 542

病に罹らなかつたならば、廣東は恐らくは去年の中に占領してしまつたかも知れない。さうすれば戦争はまだつと先迄進んで、今日頃は又た違つた状態を見たかも知れないのであります。併し恐英病に罹つてゐた爲に、蔣介石等は、日本はとてもイギリスが怖いから、廣東に来る心配はないと云ふことを確信して、廣東には備へて置かなかつた。其の處に乗じて行つたからして、却つて伴せだつたかも知れませぬ。併し何時迄も英國を恐れて居れば、到底廣東を取れなかつたかも知れないから、恐れないのが矢張りよいにきまつてをります。

#### ◇英國恐るゝに足らず

これは私が、電車の内、バスの内に於いて、汽車の中に於いて、いろ／＼の人に目に掛る毎にお話をするが、イギリス何者ぞ、イギリスの顔色を見て我が帝國の政策を定めるなどと云ふことは、それは一昨日のことであります。今日に於いてイギ

リスなどと云ふものを、さう一々恐れて居る日には、何事も出来るものではない。私は此の點に關して、皆様方がよく御研究にならんことを望んで止まない次第であります。私は維新史を研究すると同時に、イギリスの歴史を研究して居るものであります。イギリスの最近百年間の事ならば、大概皆様から御質問を受けても、御満足になる程の答が出来ない迄も、相當に應答をする用意を持つてをります。今日此の席で御問ひになつても、御返事は出来ようと思ひます。

#### ◇千萬人と雖も吾往かん

其の研究の結果に依つて申上げましても、イギリスと云ふ國を、今日日本が無暗に恐れると云ふことは、全くこれは時代錯誤で、苟くも日本が自ら正しいと思ふことであれば、所謂孟子の「自反而縮、雖千萬人吾往矣」の意志を以つてやりますことは、これは全く大切なことであります。今日の日本の立場は、アメリカがどう

考へる、イギリスがどう考へると云ふことよりも、自分のやつてゐることが正しいことであるか、道に合して居ることであるかと云ふことを、寧ろより多く考へ、正しいことであり、道に合して居ることであれば、他國の人々がどう云はうと、さう云ふことは齒牙に掛けずに進んで行くと云ふことが、今日我々の執るべき方針であります。所謂正直は最善の道であると云ふことが、即ちこれであります。

#### ◇恐る可き征服思想

それからもう一つ此の際我々が考へて置かなければならぬことは、征服思想と云ふことを退治しなければなりません。元來、日本には征服思想と云ふものはありませんでした。此の思想が入り込んだのは、これは西洋から持つて來たところの、所謂大病毒であつて、日本には昔は可なり病毒が少なかつたのであります。所謂花柳病などと云ふものも、ポルトガル人が持つて來たのであつて、これは元龜、天

正の戦國時代からのことであることは、皆様方も御承知の通りであります。花柳病の恐るべきことは誰も知つて居るけれども、征服病と云ふものは、花柳病よりもつと恐ろしい。花柳病と云ふものは、人間の皮膚を侵す。詰り、人間の肉體に止まるけれども、征服病と云ふ病氣は、これは人間の精神を侵す。人間の靈魂を侵す。人の人たるところの道を侵して行くところのものであります。

#### ◇日本は大なる和の國

日本を歴史的に、正直に見ますれば、日本には本來征服思想と云ふものはありません。國が大和と申しまして、和を以つて貴しと爲すと云ふことに極つて居ります。總てのことは所謂協力同心、大いなる和の力を以つて、總てのものを融合包容して行くと云ふことにあるのであります。人を叩き、人を挫き、さうしてそれを遣りつけてしまふと云ふことは、日本にはこれは無い思想であります。神武天皇の御東

征と云ふことは、所謂る東を征すると云つて、征服すると云ふ意味ではなくて、今日では御東遷——東に御遷り遊ばされたと云つて、征の字は所謂る行くと云ふことであつて、東の方にも出て遊ばされたと云ふ風に讀むべきであると云ふことは、昔の人が申した通りであります。私もそれに同感であります。

#### ◇明治天皇の御盛徳

さう云ふ譯でありますからして、日本は 明治天皇様の御詔勅を捧誦致しまして、御征服と云ふ御思召は一言もない。唯、如何なる敵に對してでも、敵を愛することを忘れるなど云ふ思召がはつきり拜されるのである。御承知の通り、鹿兒島に於きましても、又た高野山に於きましても、昔から敵味方の兵隊を弔ふ塚がある。一旦戦が済んでしまへば、恩怨二つながら消え、敵も味方も平等に考へて、其の冥福を祈ると云ふ大いなる心が、即ち我が大和魂、これが大和魂の總てではないが、

大和魂の主なる部分であります。

#### ◇征服思想は輸入思想

然るに西洋功利の學が盛んになつて來て、所謂る征服思想と云ふ考へがだん／＼出て來て、其の爲に總ての點に於いて、それが盛んになつて來ました。これが私は日本に對して非常な害を爲して居ると思ひます。今日我々が征服思想を以つて朝鮮に臨んだらどうかあるか、臺灣に臨んだらどうかあるか。況んや滿洲に臨んだらばどうかあるか。今日朝鮮が漸く同化の機運に進んだと云ふのは、何であるかと云へば、歴代の總督、及び歴代の朝鮮に於けるところの主なる人士が、皆な誰でも明治天皇の朝鮮併合の御思召を體して、さうして日鮮一致、内鮮一如、決して分け隔てもないと云ふ心を持つてやつたから、始めて朝鮮の人も、心からして日本人となつたのであります。

### ◇アジアの盟主たる襟度

若し征服と云ふ考へを以てやつた時に於いては、朝鮮はちろか臺灣も思ふやうには行きませぬ。況んや支那に於てをや。今日私共が支那に於いて戦ひ、勝つたと云ふことは、支那の邪なる道を叩き破つた、所謂破邪であります。破邪の劔である。降魔の劔である。けれども既に邪を破れば、これから先は我々が彼等を我々の兄弟として、愛して行くところの道を考へなければなりません。今日からさうなさいと云ふのではないけれども、今日から、此の次にはどうするかと云ふこと迄も考へて置かねばなりません。一度叩けばもうそれで澤山である。叩いた土に更に踏みつけて置けば尚更よいなどと云ふ考へでは、アジアの盟主などと云ふことは、とても出来ませぬ。アジアの盟主と云ふことに就ては、アジアを胸の中に容れてしまふだけの、大いなる心を持たなければ、とてもアジアの盟主となることは出来ないのです。

あります。

### ◇二大病の退治が急務

戦には強くて、抵抗するものには破邪の劔を以つて取拉ぐが、一度取拉いだ先は、我々はそろ／＼大いなる胸の中に之を包容して行き、括つて行き、遂に我に全く同化させて行くと云ふ道を講ぜねばなりません。それで今申しました通りに、第一はイギリスを恐れると云ふ病氣、第二は征服すると云ふ病氣、此の二つの病氣を一つ退治してお置きにならなければ、折角の大いなる勝利も、其の効果を十分擧ぐることが出来ないのではなからうかと思ふのであります。これだけ私は先づ申上げて置きます。今日のお話はこれぢやなく、これから今日のお話であります。

### ◇維新史と唯物史観

近頃維新史を研究する方々が盛んになつて來ましたことは、寔に御同慶の至りでもあります。併しながら其の研究の方面が兎角唯物史觀の方に流れて、精神的方面など云ふことは、餘り考へにされない方が多いやうであります。それで唯物史觀の方々が言はれるには、皇政維新などと申すけれども、其の實は、幕府が金に詰つて、さうして、所謂破産をしたのである。幕府ばかりではない、大名も亦金に詰つて破産をしたのである。大名ばかりぢやない、士族等も亦さうである。詰り、幕府は自ら倒れたのであつて、決して人が倒したのぢやない。外から倒したのでなくて、内から解體したものである。斯う云ふ風な考へを持つて居られます。之を要するに、明治維新と云ふものは、封建的の組織に對して、新たなる資本主義が出て來て、これに取つて代つたのである。一言にして云へば、徳川とか、前田とか、島津とか、毛利とか云ふものゝ代りに、三井とか、三菱とか、安田とか、住友とか云ふものが代つて來たに外ならない。途中のいざごさは其の時其の時の遷り變りの順序に過ぎないのである。斯う云ふ風に考へて居る人もあります。

私は全くそれをさうでないとは申しませぬ。それは幕府もだん／＼金に窮して、其の財政の困難を償ふ爲に、通貨の質をだん／＼悪くしました。揚句には安政の二分金などと云ふものは、金よりも寧ろ混り物の方が多かつた様なこともあります。誰が賈金を造るかと云へば、政府が率先して賈金を造つたやうな次第であつて、それで決して其の人々の言ふことを、私はさうでないと思ふことは申しませぬ。併しながら、もう少し深く考へになるならば、それでもつて一切の説明が出来ないと云ふことがお判りになると思ひます。

#### ◇版籍奉還を如何に解釋する乎

一例を擧げて申しますれば、皇政維新と云ふものは、單に政治的組織の變更ばかりでなくて、經濟的組織の變更であります。徳川家を首めと致しまして、三百の諸

侯その他と云ふものは、皆な大地主でありました。幕府の旗本なども皆な地主でありました。例へば新井白石先生なども神奈川の大地主であつて、只今の大磯の停車場附近は、白石先生の知行所であります。さう云ふ譯で、日本の土地と云ふものは、總て武士階級がこれを所有してゐたのであります。然るに維新の時に於いて、徳川氏は單に政權を返上したばかりでなく、土地人民を返上した。三百諸侯は其の政權を返上したばかりでなく、其の版籍封土をも返上したのであります。さう云ふことが、單に算盤珠で解釋が出来るかどうか。これには確かに物質的の理由ばかりでなく、物質以上の理由がなければなりません。日本は遅れた國である、英國は進んだ國であると申しますけれども、社會組織の上に於いては、日本が英國よりも十段も先に進んで居ります。

#### ◇英國と封建制度の踏襲

今日の英國はエリザベス時代の英國と、何等變つたことがありません。事實矢張り封建政治の状態を維持して居ります。唯エリザベス時代には、遺産相続税と云ふものが、今日程高く掛らなかつたからして、大いなる大名は何時迄も大いなる大名であつたが、今は遺産相続税が非常に高いものであるからして、若し大いなる富豪の當主が相次いで死ぬるやうなことがあれば、大いなる雪達磨が、春風に會うて小さくなるやうに、小さくなるばかりであります。併し其の形式は依然として存して居るのであります。今日イギリスに於きましては、昔の封建政治を其の儘存して居る時、其の封建政治の中に、新らしき資本主義の者が割込んで來た。金を儲けて大いなる財産家となれば、先づ古い大名の破産したる城を買つて、大いなる領地を買収して、其處に住することになつて居ります。それで中に入つて居る者は、成上りの者が入つて居るけれども、形式はちやんと其の儘存して居る譯であります。

◇普天の下皇土に非らざるは無し

然るに日本はどうであるか。政權奉還と同時に、すつかり土地も何もかも奉還してしまつたのであつて、島津にせよ、前田にせよ、凡有る大名は、徳川は尙更のこと、皆自分等の有つて居る物は返上してしまつたのであります。どうして返上してしまつたか。それは普天の下皇土に非らざるはなく、奉土の濱皇臣に非らざるはなしで、日本帝國と云ふものは、天子様の物である。如何に封建の大名と雖も、如何にそれが歴史的理由に依ると雖も、それを永久に所有し、永久に私有することは出来ないと云ふことの考へからして、これは、天子様の物を、天子様に御返し致す、返上するといふことになつたのであります。然るにイギリス流に言へば、返上させたいと云ふことであれば、或は應せんこともないけれども、それには相當の賠償金をお拂ひなされと申上げるにきまつて居ります。併しながら、徳川慶喜にせよ、

若くは島津、毛利、その他の大名にせよ、朝廷に向つて、私が封土を返上をするからして、何卒賠償金をお拂ひ下されと申上げたなどといふことは、維新の歴史には一行も書いてありません。

◇唯物史観では解釋出來ず

さう云ふことを言はないばかりでなく、考へる者もない。實は上の物をこれ迄我が物として居つたのは畏れ多いから、茲に隨んで御返上申上げる。何卒御受取下さい。斯う云ふ風になつて維新の大改革は出来て來て居るのであります。これを唯物史観で一々説明しようとするれば、餘儀なくこじ付けなければならなりません。理窟は兎や角附くかも知れませぬけれども、それは所謂の横理窟である。牽強附會であります。實際に解釋すれば、今申した通り、天子様の物を、天子様にお返しする。これ迄、私したことが間違ひである。斯う云ふことになつて、それではつきり



判つて來るのであります。

#### ◇皇政維新と其の理想

これ等の點から申しましても、どうしても明治維新の改革と云ふものは、これは決して物質的理由のみにこれを歸着せしめることが出來ないのであります。それで私は此處に斯う云ふことを申し上げて置きます。要するに皇政維新の大原因は、天皇と國家、即ち皇室と日本國との目標に依つて、此の理想が出來たのであります。即ち皇政維新と云ふものは、一方には皇室と云ふ考へが立つて居る。他方には國家と云ふ考へが樹つて居る。國家と皇室、此の二つの目標に向つて、國民が運動して、さうして其の結果出來たのが即ち皇政維新と云ふものであります。人間以外の動物は理想がなくても動き得るだらうと思ひます。勿論斷言は出來ない。私は牛でないから、どうも牛の心理状態を皆様に此處で申上げるだけの自信は持たない。馬

でないから、どうも馬の心理状態まで此處に私が代つて申上げる譯に行かない。犬でもなければ、狸でもない。狐でもなければ、兎でもない。私は人間のはしくれである以上は、人間以外のことは申上げられないから、動物のことは彼此申されませぬが、併しどうも彼等には、別に理想の必要はないやうに私は考へます。これは私の獨斷かも知れませぬけれども、人間も或る期間に於いては、動物同様の發作を持ち、動物同様の働きをすることがあります。子供などと云ふものゝやるところを見れば、よく了解が出來ます。お腹が空いた時には、子供は傍に在る物を掴んで食べる。欲しい物は誰の物であらうと、勝手に取つて行く。どうもさう云ふ風に見える。併しながら或る期間になれば、人間はどうしても反省と云ふことをせざるを得ませぬ。

動物は反芻はするけれども、反省はしないのであります。一度食べた物を又口中に戻してこれを嚙んで樂みとすることは知つて居るけれども、自分等のしたこと

について、これは善かつたとか、悪かつたとか、斯うすべきであつたとか、さうしなればならぬとか云ふやうな、反省はしません。動物は反芻する。人間は反省する。俺のやつたことは善いことであらうか、悪いことであつたらうか。又、今後はどうしなければならぬかと云ふことを、どうしても反省致します。此の反省と云ふものを満足させねば、人間は命懸けの仕事は出来ないのであります。この満足が出来ない以上は、人間は大いなる仕事は出来ませぬ。

#### ◇アメリカ独立運動の理想

世界に於ての大いなる仕事として申上げて見ますれば、米國の獨立、佛國の革命、英國の革命、又隣國支那に於けるところの革命、これ等のものゝ例をお考へになればよくお判りになります。これ等の大運動につきましましては、何れもそれゝ物質的の理由があることは、否定することが出来ません。アメリカの獨立戦争の誘因は、

スタンプ・デュータイ（印紙税）と云ふものが一つの理由であります。それから茶の輸入税と云ふものが一つの理由になつてをります。アメリカ人が自由に茶を飲むことが出来ずして、いろ／＼本國政府がやかましいことをして、本國の商人が茶を持込んで来たからして、ボストンでは遂にアメリカの人々が自棄を起して、其の茶を皆海に投げ込んだなどと云ふことがあります。いろ／＼それゝ理由はありますけれども、本當にアメリカの十三州の人をして慨然として起たしめたのは、即ち獨立の機文であります。近頃はあゝ云ふものは流行らないから、多分誰方もお読みにならず、或はち忘れになつたか知れませんが、偶にはあゝ云ふものを引出して御覧になつても亦面白い文獻であります。これを讀んで見れば、今日と雖も、若し我が米國人であれば、慨然として起つて戦場に飛出さなければならぬやうになつて居ります。あれはトーマス・ゼファーンソンが書いたものであつて、フランクリンを初め、いろ／＼の人々が署名をしてをります。

### ◇英國・佛國・中國革命の理想

英國の革命も其の通りであります。これはビュリクタン（清教徒の革命）の思想が起つて、これをビュリクタン・レボリューション（清教徒の革命）と申して居ります。

フランスの革命に於いても、御承知の通り、自由・平等・友愛の三つのものを理想として起つたものであります。

支那の所謂革命、孫逸仙等のやつたところの革命でさへも、亦其の通りであります。これは滿洲を退治し、漢民族を興すと云ふ、廢滿興漢の民族主義から起つたところの革命であります。革命がいゝとか悪いとかいふ問題ではありませぬ。但だ總て世界の大運動と云ふものは、單純の力で行く筈はありませぬ。船を引張つて河を溯らするのには、一本の綱ではいけない。兩岸から引張つて行かねばなりませぬ。又真中にもこれを竿差して行くものがなければなりませぬ。

### ◇大運動には大理想あり

さう云ふ譯で、大運動には凡有る力がありますけれども、其の力の中の主なる力と云ふものは何であるかと云へば、理想であります。即ち總ての人が精神的に斯くあるべき筈、斯くあらねばならない、斯くやつてこそ良心が安心して、安心するばかりでなく良心が鞭打つて、孔子の所謂る身を殺して仁を成すと云ふ所迄行きつかねば、本當の運動は出來ないのであります。即ち、今日我が皇軍が神の如く強いと云ふことは、物質的からの考へではありませぬ。今度戦をしたらば金鷄勳章は何々を戴ける、五級であらうか、四級であらうか、或は飛んで三級であらうか。金鷄勳章の何級であるなどと云ふことを考へて、敵に向つて突進が出来る筈のものではありませぬ。敵に向つて突進する時には何も彼もない。唯我が 天皇陛下の爲に臣民としての誠を效すのみであります。斯くて死ぬる時に於いても、我が父とも言はず、

我が母とも言はず、或は我が妻とも言はず、總ての人が申合せたやうに、天皇陛下萬歳と言つて息を引取るのである。天皇陛下萬歳と云ふ唯それだけの言葉の中には、日本國民としての持つべき、凡有る理想を含んで居ることが明らかになつて居るのであります。

#### ◇文永弘安の役と元弘建武

それで皇政維新について更に進んで考へなければなりません。我が皇政維新は、日本三千年の歴史に於いて、殆んど比類のない大事件であります。此の事件は日本の歴史に於いて、我々が特に研究しなければならぬところの大事件であります。此の事件をさへ我々が研究して行けば、日本の歴史は皆よく讀めるのであります。御承知の通り、日本の歴史の中に於いて凡有る時代がありました。其の時代の中に於いて、主なる二つを茲に擧げてお話を申し上げます。例へば文永、弘安の役、即ち蒙

古の役、此の時に於きましては、丁度これは承久の變があつた後であります。日本が四分五裂した後である。日本が四分五裂して、お互に内輪で相争うた後に於いて、文永弘安の役と云ふものが出て來たのであります。其の時に於いて、京都に於かれては、龜山天皇、鎌倉に於いては北條時宗、或は九州の凡有る所の武士、中國の凡有る所の武士、その他日本國中の凡有る僧侶神官、總ての階級、總ての人が、舉國一致、唯だ日本を如何にして護るかと云ふ點に於いて一致したのであります。即ちこれは國家と云ふものを目標として、國民的の一致を來したところの一つの歴史的實例であります。

それからもう一つの例を擧げて見ます。それは元弘、建武の例である。此の時に於きましては、後醍醐天皇様が皇權恢復と云ふことを思召し立たれて、勤皇の人々が皆勅旨を奉じて動き出した時であつて、これは日本に於けるところの勤皇精神の最も燃え立つたところの一つの時代であります。

### ◇皇權恢復と國家擁護

然るに我が皇政維新と云ふものは、どうであるかと申せば、元弘建武の所謂皇室を中心として働いたところの時代と、文永弘安の國家を中心として働いたところの時代と、此の二つの時代を一つに集めて、更により多きところの意味を含んだる一つの大きい時代であります。茲に皇政維新の特色があるのであります。皇政維新を一方の面から申しますれば、これは勤皇運動であり、政權を朝廷にお返し申上げる、七百年來朝權を私したるところの覇府を倒して、政權を朝廷に返上申上げる、即ち 天皇親政の實を擧ぐると云ふところの運動であります。他の面から見れば何であるかと云へば、外國の勢力が來り迫つて我が獨立の危くなるころの時代に際して、日本國民の力を合して、外國に對し、我が帝國の獨立を完全に保持せねばならぬと云ふ點からの運動であります。即ち皇政維新は一つは皇權恢復であり、一つは

國家擁護である。此の二つの理想に依つて始めて此の運動が立派に出來上つたのであります。一つの理想でさへも國家を動かすには、十分の力が必要であるのに、況んや二つの理想を一つに合して持つて來たからして、實に日本三千年の歴史に比類なきところの大きい運動が起つて來たのであります。即ち今日も我々は其の運動の餘勢に乗つてやつて居る譯であります。

### ◇到著點の一致

皇政維新の先驅をなしました人々は、これ等二筋の道を歩いて來て居ります。或人は皇室と云ふ點から總てのことを考へて來ました。その代表者として申しますれば、高山彦九郎などがそれでありました。畏れながら 天子様を普通の 天子様として上に戴き奉り、朝廷を昔の御位置に返し奉りたい。これが即ち皇室を中心として考へたところの思想であります。もう一つは國家の擁護である。即ち林子平など

と云ふ人がそれでありませう。佐久間象山先生なども其の通りであります。我が日本國をどうするか。日本の國家をどうすれば保つことが出来るか。此の思想が基になつて動いて来たのであります。然るに此の兩方の道を行つた人は、丁度東海道を行くのと、中山道を行くのとあつたやうなものであります。今で云へば東海道の本線を行く人々と、中央線を行く人々と同じで、踏み出した所は違つても、行き著く所は同じ所に行つてしまふのであります。

◇二者不可分

即ち具體的に申しますれば、國權を保つと云ふことはどうすることか。日本國民の力を一致して行くより他に仕方がない。日本國民の力は誰が一致するか。誰に依つて一致されるか。誰を中心として一致するか。天子様を中心とするより外に一致する道はないのであります。それで國權論者は、國權を擁護する爲には皇權をど

うしても恢復せねばならぬと云ふことに、結論はなるのであります。それならば皇權を恢復すると云ふことは、どうであるか。皇權恢復論者は、皇室の最も宸襟を惱まし給ふところは、即ち外國の勢力の我が國家を侵蝕することである。外國の勢力が我が國家を侵蝕することについてはどうするか。宸襟を安んじ奉る爲には、陸軍を盛んにしなければならぬ。海軍を盛んにしなければならぬ。外交政略を有力ならしめなければならぬ。商工業を盛んならしめなければならぬ。國力を強くするより外に、皇室の尊崇を爲すことは出来ない。國が弱く、國が役に立たない程意氣地がなければ、如何に皇室を尊崇しようとしても出来るものではない。それで國權論も皇權論も、これはたゞ物の見方に依つて違ふばかりであつて、國權を擁護すると云ふことは、即ち我が皇權を恢復すると云ふことであります。皇權を恢復すると云ふことは、即ち國權を擁護することでありませう。

### ◇停車場は明治元年

此の如くにして二つのものはちゃんと一致して来たのであります。初めは違つた所を歩いたけれども、行き著いた所は同じであります。それで國權論者と皇權論者は銘々違つた所を歩いたが、停車場に著いて見れば、『あゝ君も此處に来たか、僕も此處にゐる』と云ふ様な譯であります。停車場は何處であるかと云へば、即ち明治元年で、明治元年になつて見れば、總ての人が一緒になつて、成程斯うだと云ふことになつて来たのであります。其の時になつては、攘夷論とか、開港論とか、吝くさい論はなくなつてしまひました。看板を塗替へたのではなく、變節改論したのではなく、其の場になれば、ちゃんと一切のものが濟んで来てしまつたのであります。もう問題はない、丁度粟の穂が開いて、粟の實が落ちてしまつたやうなもので、中は皆同じであります。

### ◇日本は君國一致

それで私の考へまするのには、餘所の立憲國では君民一致と云ふ。君と民とが一致すると云ふことは、これは日本に於ても其の通り云ふことが出来ます。併し餘所の國で云ふことが出来ずして、日本でのみ言ふことが出来るのがもう一つある。これは皆様方によく御記憶になつて戴かなければなりません。それは何であるかと申しますれば、君を目標として行けば、行き著く先は國になる。國を目標として行けば、行き著く先は君になる。即ち日本は單なる君民一致でなくて、君國一致であります。君と國とが一致して居るのであります。君國一致と云ふことが、即ち日本の國體の本宗である。茲に始めて日本の國體と云ふものが明白であります。國體明徴などと云ふことは、さう長い言葉で言ふ必要もなければ、難しく論ずることもありません。唯日本では、天皇様が即ち國家、國家は即ち、天皇様が御支配遊ばされて居る

と云ふことであります。君と國と一致してゐると云ふことにさへ、頭がしつかり行けば、何等間違つたことはない。餘所の國では君と國とは全く別問題である。其の爲に國は重い、君は軽いなどと云ふ問題が出て來るのであります。餘所の國では、君と云ふものを上には置くけれども、全くそれは昔で云へば頭巾、今で云へば帽子のやうなものであります。或る所の君はシルクハットのやうな君もあり、或る所の君はカンヰ帽のやうな君もある。君の値段にも非常に安つばいのもあれば、幾らか値打のあるものもある。さうして君は外から持つて來たものであるからして、當然君は軽くして國が重い。君は軽くして民は重いと云ふことが、西洋のこれは政治學の原則であります。支那でも其の通りであります。

#### ◇忠君愛國の大理想

唯だ日本だけが其の點に於いて違ふ。違ふところに日本の國體の尊さがあるので

あります。日本では國と君とは異名同質、國と云ふ時には、國を統治遊ばされるところの君がちやんと在ますと云ふことが、我々には合點されるのであります。君と云へば君の君臨遊ばされるところの我國と云ふものを、ちやんと我々は承知して居る。それで君と國とを區別して、どつちが重いか、どつちが軽いか云ふやうな議論は、日本には無用であるばかりでなく、有害であります。さう云ふことを考へる餘地さへありません。同じものをどつちが重いか、どつちが軽いか云ふ問題はないのであります。我々が愛國と云ふ時には、即ち忠君を意味して居り、我々が忠君と云ふ時には、愛國を意味して居ります。維新の際は、即ち今申した通り、忠君から愛國になつた者があり、愛國から忠君になつた者もありますけれども、忠君愛國と云ふものが、合體したる大理想に於いて出來た、大いなる仕事であります。此の忠君愛國と云ふ大いなる理想を除却して、維新の歴史を解釋しようとするのは、無理であります。とても出來ない仕事であります。強ひてやれば先に申した通りに牽強



附會にならざるを得ませぬ。

#### ◇倫理的國家としての日本

更に一步を進めて研究を致して見ますれば、君と國との不可分であると云ふことは、我が國家の本質が、倫理的國家であるからであります。君と國とは何故に不可分であるかと申せば、我が日本は權勢的國家でもなければ、權力的國家でもありません。我が日本は約束で成つた國家でもなければ、利益の交換で出来た國家でもありません。又暴力に依つて出来た國家では尙更ありません。即ち我が國家は、皇室と國民とが不可分で、天皇は家長にましまし、家長即ち君主である。日本は一大家族的の國家であります。一大家族的國家と云ふ原理原則を、我々が把へない以上は、日本の歴史を到底理解することは出来ないのであります。茲に始めて日本の本當なる歴史を理解するところの鍵が與へられたと申さねばなりません。それで日本

に、天皇機關説などと云ふものが起つたのは、要するに日本の歴史を知らずして、日本の國の成立を知らずして、天皇は唯國家を代表するところのものである。丁度會社の社長が、其の社を代表するところのものであると云ふやうな考へから持つて來たのであります。これは全く西洋かぶれの考へであつて、日本には未だ嘗てさう云ふ考へは昔からなかつたのであります。全くこれは翻譯思想であります。

#### ◇皇道の發揚が終局の目的

それで皇政維新は倒幕が目的ではありません。幕府を倒す爲に皇政維新が出来たのではありません。又、開港とか鎖國とか云ふことを決することが目的ではありません。其の目的は皇國本來の面目を發揮して、これを世界に宣揚することでありませぬ。日本の面目を發揮して、それを世界に宣揚することが、即ち明治維新の目的であります。其の結果が明治時代に於いて漸く萌し、大正時代に於いて漸く成長し、

昭和の御代に至つて漸く其の實が成りつゝあるのであつて、今日はまだ全く成熟したとは申されません。まだ刈入れる時ではないけれども、漸くに其の實が成りつゝあると云ふことを、我々は記憶すればそれで澤山であります。

#### ◇西郷南洲の達見

それで今日から考へて見ますれば、明治六年西郷南洲等が朝鮮問題を惹起したのも、これは決して簞から棒に考へ出したのではありませぬ。彼等は日本を 神武天皇の昔に復すところの目的を以つて、皇政維新をやつたのであるからして、唯だ舊幕府を倒して、昔の大名や何かを削ぎ上げて、これに代つて自分等が第二の大名になると云ふ考へはないのであります。若し明治維新に理想がなかつたならば、西郷や、木戸や、大久保、其の他の元勳が、丁度昔の源平時代の如く、平家に代つて源氏が出たやうに、もう一つの政府を作ること、決して出来ないと云はれませぬ。

併しながら彼等がさう云ふことを露ほども考へず、維新の目的と云ふものは技にありと云ふ考へでやつたことを、實に私は敬服致します。

世間では西郷南洲と云ふ人を、これは保守黨である、文明開化のことを知らずして、極めて頑固の人であつて、唯だ一箇の鹿兒島武士である、折角拳骨を振上げたが、持つて行き所がないから、多分朝鮮にでも持つて行く積りであつたらうなどと考へるのは、それは己の心を以て英雄の心事を付度すると云ふものであつて、これは非常なる間違ひであります。彼は其の當時、即ち今日のことを明治六年に豫想して居るのであります。私は皆様方が此の漢口の陥落を祝ふ時に於いても、西郷南洲が如何に地下に於いて考へて居るかと云ふことを考へになつて、南洲の爲に一片の香でも焚いてお上げになるのが、これは國民として我等の先輩に對する義務であると信ずるのであります。要するに西郷南洲の企圖したことは、明治二十七八年役、明治三十七八年役、昭和十二、十三年の今日迄延期されて、それが年と

共に行はれてゐるのであります。

#### ◇日本と亞細亞興隆の理想

衣食住の問題は固より大切であります。併し人はパンのみに生きるものではありません。國民的大活動には、大いなる理想があらねばなりません。今日の我々が、斯う云ふ大活動をしてゐると云ふことも、決して我々が支那を取つて、銘々が支那の物を分奪して行くと云ふ譯ではないのであります。越王勾踐吳を破つて歸ると云ふやうな譯ぢやない。「越王勾踐破吳歸。義士還家盡錦衣。宮女如花滿春殿。只今惟有鷓鴣飛。」と、唐の李白が作りましたが、越王勾踐が吳を滅したのは、吳の榮華を自分等が占むる爲であります。我々が支那に向つて、此の如き大いなる仕事を爲しつゝあるは、支那を分奪して、さうして我々が贅澤をしようと云ふ様な考へではありません。所謂我がアジアの興隆を圖つて、我が皇道を世界に宣揚する、即ち

—294—

INT 542

我が日本の倫理的國家の力を發揮して、世界に向つて我が日本主義を實行すると云ふことに外ならないのであります。それが即ち維新の目的であつて、其の目的が判らなければ、今日の事も亦判らないのであります。古きを温ねて新しきを知ると云ふことが、即ち其のことでもあります。

#### ◇日本の歴史には斷層無し

御承知の通り歴史は繼續致します。併しながら支那の歴史の如きは繼續してをりませぬ。支那の歴史に比べて見れば、日本の歴史は若いのであります。神武天皇の御時代が支那では東周の世であり、支那に於いては文化の絶頂であります。それ程支那は古い國であります。併しながら支那の歴史は斷層があつて、續いてはをりません。中に幾つもの切目があります。然るに我が帝國の歴史は、支那歴史より新しきにも拘らず、始めから終り迄一貫して居ります。全く斷層は無く、今日迄一貫し

—295—

INT 542

て居り、繼續して居ります。茲に日本の歴史の有難味があり、又其の特色があるの  
であります。それで皇政維新の希望が、神武の古に復ると云ふことは、即ち左の端  
にあつたところの物を叩けば、右の端にこれが應ずると云ふだけのことであつて、  
神武天皇の御代も、明治天皇の御代も、日本の歴史に於いては、これは同じもので  
あります。唯だ時間が違ふだけであります。

◇維新の大事業は繼續中

支那の歴史の如きは、三皇、五帝、春秋、戦國、秦、漢、唐、宋、元、明、それ  
ぞれ斷層が出来て居つて、何等聯絡はありません。別々であります。幾つも違つた  
ものを組合せたものと、一つ一緒に合して居るものとは、これは到底同日に話すべき  
ものではありません。私共は今日に於いて、我が皇政維新の出来た原因に遡つて、  
其の理想を明かにし、其の理想を繼續して、大いにこれを今後に大成しなければな

らないのであります。今日は皇政維新が出来上つた時代ではなく、今日尙ほ  
皇政維新の大演劇が盛んに行はれて居る時代であつて、私共も茲に皇政維新の原因  
を論じつゝも、今尙ほ皇政維新の波に乗つて居ると云ふことを、自覺せねばならぬ  
と思ふのであります。

## 東亞の操觚者各位に告ぐ

### ◇非常時に於ける操觚者の任務

東亞操觚者の木鐸たる各位を、我が皇都に於いて驩迎することは、私共の最も欣幸とするところであります。私は親しく各位の前に起つてお話を致すべきであります。が、微恙の爲にその代りとして、本文を各位のお手許まで差出すことに致しました。悪しからず御諒承を願ひます。

只今は申上ぐるまでも無く、東亞に於いても、歐洲に於いても、戦争最中であり、併しながら戦争は一時的のことであり、我等操觚者の事業は、戦争に於いても、平時に於いても、永久不斷、未だ曾つて停止斷絶する如きことはありません。

要するに私共の仕事は、一方に於いては前途を指點する指導機關の用を足し、他方に於いては現在の状態を宣明し、これに善處するの途を提供するものであります。未だ曾て人類の生活と暫くも離れず、民族の存続と寸毫も間斷無く、國家の存養と常に相ひ始終するものであります。

然もその任務は、平時時に於いても、非常時に於いても、渝るところがありません。が、非常時に於いて最も私共の大なる責任を覺ゆるものであります。それは非常時に處しては、私共がその職責を盡す範圍が廣大であり、複雑であり、而して且つ重要であるからであります。

### ◇日本國體の徵象

私は此の機会に於きまして、一、二、卑見を各位の前に陳述し、各位の誨を乞ひたいと存じます。第一は折角、東京に來られた上は、何物か獲て歸國せられんこと

を望むことであります。それに就ては、第一、我が皇居、第二、明治神宮、第三、靖國神社、此の三所に親しく詣られて、心眼を開いて觀察せられたならば、必らず得るところがあるであらうと思ひます。

如上の三所は、何れも我が日本國體の象徴として、如何に我が二千六百年來の臣民が、我が萬世一系の皇室に向つて忠誠を效しつゝあるかといふことを、諒解せらるゝに於いて、大なる實物教訓を與へるものと信じます。

#### ◇日本國體の特色

私は曾て昨年、獨逸新聞記者諸君の來訪に際し、諸君に向つて日本の國體が、世界列國のそれと比較して、如何なる特色を有つてゐるかといふことに就いて語りました。

それは申す迄も無く、日本は家族的國家にして、「情乃父子、義乃君臣」と申す言葉



に譬せてをります。故に如何なる場合に於いても、日本臣民は、天皇の爲には、身も魂も、總てのものを捧ぐるといふことを以つて、その本來の目的とし、且つこれを以つて大なる誇りと信じてゐるものであります。日本國民には凡有る缺點がありませんが、このことだけは二千六百年の歴史を貫通して、未だ曾つて渝ることなく、今後と雖も、皇統の天壤無窮と共に、此の忠誠の心は決して渝るものでないと信ずると申しました。

私は重ねて以上のことを各位に申上ぐることを、最も本懐と存じ、且つ光榮とするものであります。日本の國論沸騰し、動もすれば國內に分裂を來たさんとするが如き傾向を、往々にして生じたこともありました。其の爲に日本の國體を知らざる者は、日本與みし易しとなす者があります。併しいざとなれば、日本は皇室を中心として、一國を打つて一丸となす、鞏固なる大團結を來たすことは、從來の歴史が證明する通りでありまして、これは今後も決して疑ひ無いものと斷言することを憚

りませぬ。併し「君子は人に贈るに言を以つてす」と申しますから、僭越ながら、お土産の印までに申上げたのであります。

#### ◇西力東漸と東亞の災厄

次に申上げて見たいことは、東亞の現状であります。所謂十九世紀は、東亞全體にとつて、大なる災厄の世紀でありました。即ち歐洲に於けるナポレオンの争亂が熄んで以來、爾後百年間、歐洲の勢力は恰も大河の決する如く、恰も大なる瀑布が落下する如く、亞細亞に向つて滾々として流れ來りました。所謂西力東漸といふのは、このことであります。

歐洲人はその新たに得たるところの發明の力を利用し、巨大なる軍艦、素晴らしき大砲、その他凡有る武器を以つて、且又た生産上に於いては、蒸氣機關の發明以來、凡有る工業が發達し、限り無き武力と、限り無き富力とを以つて、然もこれに

加ふるに、限り無き貪慾と、限り無き狡猾手段を以つて、東亞を殆んど植民地化せんとしたのであります。而して彼等はこれを稱して、我等東洋人に恩を著せ、自ら白種人種の負擔と稱してをります。寔に圖太き了見と申さねばなりません。

而して遺憾ながら、半ばは殆んどその通りとなつたと申しても差支あります。此の事實は博識なる各位の特に熟知せらるゝところであつて、私が今茲に喩々の辯を費す必要もありません。

#### ◇日本の蹶起と東亞の復興

然るに此の間に於いて、猛然として起つて此の勢力に抵抗した者は、誰であつた乎。何處より來りたる乎。甚だ自畫自賛の様であります。それは即ち我が日本であります。

日本はその國土の位置よりして、開國の時期も、自ら後れてをります。而してそ

の爲に歐米諸國の大なる壓力を蒙むることも、他に比すれば、輕少であつたかも知れませぬ。輕少とまで行かずとも、若干輕かつたかも知れませぬ。併し日本も亦殆んど彼等の爲に蹂躪せられんとする危機に瀕したることが、一再では無かつたのであります。然るに日本がこれに對抗し、遂に西力東漸の勢を翻して、東力西漸の古に復するの端を啓きたるは、寔に痛快のことであります。これと申すも、畢竟するに、日本が獨り己の國體を持し、皇室中心主義によつて始終した爲と申さねばなりませぬ。

私は決して日本が獨力を以て十九世紀の大勢を翻し、西より東に向つて流れんとしたる潮勢を、管に堰止めたばかりでなく、更にこれを東より西に向つて轉流するに至らしめたる功を専らにするものではありません。

然も明治三十七八年（西曆一九〇四—五年）の役は、確かにその分水嶺であつたといふことを、斷言して憚らぬものであります。爾後の歴史は、その以前の歴史と

全くその方向を異にしてをります。固より二三の出入があつて、爾後と雖も、西力東漸の事實もあれば、又た彼等が多年の計畫と努力とによつて築き上げたる勢力は、牢固として抜くべからず、依然存在したることもありますが、大體の方向に至つては、正しく以上申上げた通りであります。

#### ◇東亞の自覺と中國の歐米依存

凡そエジプトに於いて、アラビアに於いて、イランに於いて、印度に於いて、泰國その他南洋諸國に於いて、特に我が隣國の中華民國に於いて、期せずして自覺の運動興り、期せずして自主の運動生じ、今日も尙ほ隨所にその鋒鏑を顯はし、その氣焔を擧げつゝあります。

但だ遺憾なるは、斯る場合に於いて、中華民國が日本を敵とし、日本を敵とするの結果、歐米依存を事とし、此の亞細亞再興の機運に反對するの運動を起したること



であります。此の運動は、支那改革の率先者であり、今既に地下に眠りたる孫文、  
黄興、黎元洪、その他の諸君の甚だ心外千萬とするところであらうと思ひます。  
即ち汪精衛氏が、此の際慨然として國民黨中より蹶起し、重慶の重圍を脱して義  
を唱ふるに至りましたのは、寔に先輩孫文氏の志を達成する所以であると申して  
も、差支ないと思ひます。

#### ◇分離せしめて支配す

つら／＼白哲人種の亞細亞に於ける工作を吟味しますれば、彼等は「先づ分離せ  
しめて、而して後にこれを征服せよ」といふ格言を常に實行してをります。  
今日でさへも、印度の獨立が思ふ様に行はれないのは、多くの原因もあります  
が、回教徒とヒンズー教徒との軋轢あるが爲であります。而して此の軋轢たるや、  
英國の印度統治政策の根本義の一でありまして、常に兩者の間を離間し、中傷し、

疎隔せしめ、競争せしめ、交闘せしめることを以つて目的としたもので、印度幾億  
の國民は正しくその策に乗つてゐるものであります。

即ち今日、日本と支那との間に、事變が三年に亘つて尙ほ熄まざることを以つ  
て、最も愉快とするものは、誰でありますか。それは即ち東亞を以つて我が植民地  
と見做すところの彼等でありませう。蒋介石の如きは、自ら東亞の一人物を以つて任  
ずる存在でありながら、歐米人の爲に僕々爾として、彼等の慾望を満たす勞役を、  
これ努めつゝあることは、如何にも笑止至極のこと、申さねばなりません。

#### ◇漁夫の利を占むる英米

今後と雖も彼等の魔手は、凡有る方面に動いて、亞細亞諸國が一致することを、  
妨害するであります。所謂の蝸蚌を相争はしめ、漁人の利を占めんとするは、彼  
等本來の慣用手段でありまして、彼等以外世界の何れの民族も、大概彼等の手に乗

。この地方は、支那改革の先導者であり、今既に地下に眠りたる孫文、

つて、彼等の爲に致されてゐたのであります。

斯る明白なる事實を見、斯る昭著なる經驗を積みながら、今尚ほ依然として、彼等の爲に翻弄せられ、彼等の爲に御用を勤むる如きことを爲す者あらば、これ實に東亞の興隆を阻害するところの大敵と云ふも、決して過激の言ではありませんまい。

◇今後の世界と封建的傾向

更に一步進めて考慮すれば、世界の傾向は、地理的に團結するの風を來たしてをります。語を換へて云へば、今日及び今日以後は、世界を擧げて一の封建政治の型を爲しつゝ進行してゐる様に思はれます。

アメリカ合衆國は、大なる聯邦であります。彼はこれを以て足れりとせず、更に南北アメリカを以つて一團と見るところの、パン・アメリカン・リーグといふものを作りつゝあります。現に全米會議は屢々行はれつゝあります。昨年の如きも、チ

リに於いてその會合を見、アメリカ合衆國の國務長官ハル氏の如きは、自ら出張して大いに工作するところがありました。

更に歐羅巴は、今實に諸強國間に交戦最中であつて、その前途は逆睹し難きものがあります。それでも歐洲聯邦説は、曾て佛國の政治家ブリアンの唱道するところとなり、又今日に於ても、それを實現せんとするものが少くありません。今回の戦争が、何れの日を終結すべきか、豫言は出來ませぬが、始めあれば終りあるは當然のことです。何れ終結する時には、終結するであります。而して後の形勢は、各國分立となるか、將た一種の歐洲聯邦となつて、互に利害を共通し、得失を交換し、その大なる力を以て他に臨むか、未だ猝かに斷言し易くありません。併し私共は世界の大勢として、此の大なる團體の出で來ることを、念頭より忘却してはいけないと信ずるものであります。アフリカに於いても亦然りであつて、カイロより喜望峯に至るまで、それと大

なる團結の出で来るべき日は、目前ではないまでも、やがてはその時節が到來しないとも云へませぬ。今日に於いても南阿聯邦は、一の勢力を有つてをりますから、これが追々その勢力を伸張する日に於いては、アフリカの大なる聯邦を見る日が無いとも申されませぬ。濠洲及びニュージーランドに於いては、今既に半ば以上それが出來上つてをりますから、この上のことは申す必要がありません。

#### ◇東亞の團結を要す

斯く觀來れば、東亞のみが、個々に分立してゐるといふことは、全く世界の大勢から見離されたることとなり、折角興隆しかけたるところの東力西漸が、再び東漸に立戻る様なことが無いとも云はれませぬ。

私は各位が此の世界の大なる趨勢を看破し、特に我々東亞の各民族として、東亞興隆の爲に、最も考慮せねばならぬことと信じます。各位も御承知の通り、彼れ白

哲人種は、我等を遇するに、差別待遇を以てしてをります。

#### ◇白哲人種の横暴

ヅエルサイユ會議の際に、世界大戰に於いて、最大とは申さぬが、相應の役目を備いたる我國が、當然の要求として持出したる、人種平等の意見は、同盟國である英國が、これを排斥して、遂にものにはならなかつたのであります。我等は彼等よりも、より以上の待遇を期待するものでもなく、要求するものでもありません。唯だ彼等と同様の、即ち水平並みに取扱うてもらひたいと云ふのみであります。それさへも彼等は拒んでをります。

各位も御承知の通り、彼等が東亞に臨む時には「世界は世界の爲の世界である。人類は同胞である。かゝるが故に白哲人種が東亞を植民地同様に取扱ふことは、これは天地人道に叶ふものである」と、大びらに云つてをりますが、いざ我々が彼等

の方面に向つて行けば、所謂る差別待遇を事とし、「日本人入る可らず」「支那人來る可らず」といふ如き態度をとり、到る處に障壁を設け、到る處に鐵條網を張り廻し、世界は白哲人種の爲の世界であつて、有色人種の爲の世界では無いといふ事實を、如實に實行してをります。

#### ◇東亞の一致協力を祈望

所謂る「これを忍ぶれば、何れを忍ぶ可からざらん」と申すことは、この事でありませぬ。然るに此の如きことが、今尙ほ行はれてゐる所以は、畢竟東亞の民族が、同心協力以つて東亞の頽勢回復に努力することを怠つてゐる爲といふも、過言ではなからうと思ひます。

私は東亞の操觚者を支配し、その言論の木鐸たる各位に向つて、甚だ長談義を試みましたが、然も衷心より祈るところは、東亞の一致協力であります。一致協力の

中には、各民族それ々の特色を保存し、それを發揮することは、固より當然のこととあります。所謂「和して同ぜず」とは此の事であります。此の和協一致の精神を以つて當る時に於いては、必ずや我等の志望を達する日が遠くないと信じて疑はぬものであります。(昭和十五年二月八日 於熱海樂園莊)

興亞の大義

昭和十七年九月十五日 印刷  
昭和十七年九月二十五日 發行  
昭和十八年三月十五日 三版

(出文協承認)  
あ430744號



發行所 (日本出版文化協會)  
番號一三四五〇五番

配給元 東京市神田區淡路町  
二丁目九番地

著者	德壽猪
發行所	東京市神田區三條町三丁目十六番地
印刷所	東京市神田區三條町三丁目十六番地

興亞の大義  
定價金 壹圓

日本出版配給株式會社



IMT 548 314